

第4章 考察

第1節 棟飾瓦からの一考察

今回の3次にわたる調査で、中世瓦が大量に出土した。しかし、瓦が使用されていた建物を考える根拠となる遺構（礎石・雨落ち溝など）は検出されていない。最初の調査となった第203次調査で、焼土とともに瓦が多く出土した時には、当地が有岡城の主郭からほど近い侍町であり、現存している文献に寺院の記載が見られないため、高級武士の屋敷を飾っていた瓦で、信長軍による攻撃（1579年）で焼けおちたものであろうと考えた。しかし、2度目の第217次調査で、寺院の堂内に敷くための碑や、大棟・隅棟を飾る鬼瓦（以後、「棟鬼①+隅鬼」とする）が出土した。整理過程で、瓦は1500年前後に作られたものであること、また、先の第203次出土瓦の中に方形造建物の堂頂を飾る宝珠があることから、これらの瓦は、伊丹城（居館）期に建築された寺院に使用されていた瓦である可能性が高くなった。その後の第231次調査では、第217次出土の棟鬼とは異なる棟鬼（以後、「棟鬼②」とする）や、“鯪”に似た棟飾瓦（以後、「鯪」とする）が出土した。完形には復元できないが、どちらも2個体（1対）あることが確認できる。

棟鬼①は、阿・吽の形相をもつ2個体（1対）である。それに伴う隅鬼は、少なくとも7個体以上ある。それらは“内子”をつくり鬼面内型とし、鬼の大きさの均一化が図られていることから、同一建物に使用したものと考えてよいだろう。また、7個体以上あるということは、すべてが隅鬼なのではなく、隅鬼4個と二の鬼4個のセットか、隅鬼4個と降鬼4個のセットと見るべきである。

棟鬼②は、焼成や母屋（註1）の厚さ・構造が棟鬼①と異なる。また、それに伴う隅鬼が出土していない。

これらの棟飾瓦は、1遺構からの出土でなく、3回の調査区のさまざまな遺構から出土している（第163図）。それらから、棟の形を推定し、整理すると以下の4棟の建物が存在していた可能性が見出せる。

宝珠	…203次SK63(106)・SK93(115)	→方形造建物
棟鬼①+隅鬼	…203次SK93(158他)、217次SD103(67他)・SX301(88他)	→入母屋造建物
棟鬼②	…231次池状遺構(248)	→切妻造建物
鯪	… 同 (140)	→ 同

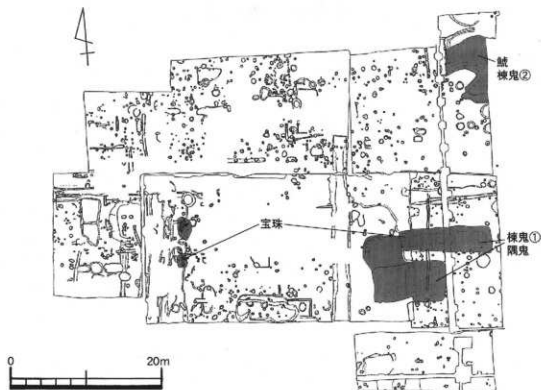
次に出土状況を整理すると、以下のようになる。

- 1、瓦は、遺構を埋める際に大量の炭灰とともに廃棄されていた。
- 2、鬼瓦や鯪瓦を含む瓦は、その多くが細かく割れている。
- 3、廃棄されていた遺構は同じ遺構ではなく、同一個体の瓦がまったく別地点の遺構から出土した例もある。

以上から見て、戦禍などの火災により倒壊した建物の部材・瓦が、遺構内に廃棄されたと考えられる。

次に、今回出土した鯪に注目してみたい。

鯪は城郭建築、主に天守の棟飾瓦として使用され、天守の祖となる安土城に飾られていたことが明らかになっている（註2）。鯪そのものは、宋の魚吻の影響を受け考案された棟飾りで、13世紀末に描かれた『男会三郎絵詞』に描かれている大棟を咬んで反り上がる魚形の棟飾りが、鯪の原形とされている（註3）。現存する堂宇に鯪を見つけることは困難である。もともと、寺院建築で棟を飾って



第163図 棟飾瓦出土地点

いたものは鵜尾であるが、13世紀中頃を最後に改修目的以外には作られなくなる。

今回出土した鯨は、鯨という漢字から想像される「魚」的な風貌が極めて薄い。安土城跡出土の鯨片（註4）や有名な名古屋城の鯨のような魚の胸ビレの表現はなく、どちらかと言えば鵜尾の腹部のようである。また、天守の鯨のように棟の上にいるタイプでなく、むしろ鵜尾のように棟を挟み込むタイプの棟飾りである。鵜尾と鯨の間、鵜吻に近い。

今回出土した瓦が示す15世紀末～16世紀初という室町時代の後期は、応仁の乱に始まる「戦国時代」にあたる。この頃から、戦乱による火災で建物が焼失するのを嫌い、防火を願って魚の風貌を強めているのではないかと考えられる。今回出土した鯨は、城郭建築に使用される鯨に変貌する過渡期のものと考えられる。

今後、周辺の調査が行われ、これらの問題点に関わる遺物・遺構が発見された時、更なる考察を行いたい。
(中畔明日香)

註1 小林章男『鬼瓦』大蔵経済出版 1981年

註2 滋賀県教育委員会・滋賀県安土城郭調査研究所『特別史跡安土城跡発掘調査報告8』1998年

註3 大脇潔「鵜尾」『日本の美術』392 至文堂 1999年

註4 註2と同じ

かながらも得ることを主眼に、瓦を構成する諸要素を検討し分類を試みた。

出土瓦の種類は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、面戸瓦、雁振り瓦、鬼瓦、鯨、宝珠瓦である。面戸瓦、雁振り瓦などの道具瓦は、法量に分かる良好な状態での出土点数が余りにも少ないため分類作業から外し、残りの良い軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦について報告する。

軒丸瓦、軒平瓦は全ての個体を抽出し、分類は瓦当文様で大別し、さらに法量と製作・調整技法を観察して細分している。丸瓦、平瓦に関しては第231次調査池状遺構では全形をなるべく留める個体、それ以外の遺構では全ての個体を取り扱い、法量、観察できる製作・調整技法、湾曲比を比較して分類を行った。軒丸瓦はNM、軒平瓦はNH、丸瓦はM、平瓦はHを番号の前に付している。

軒平瓦の観察表(第34～40表)では、「瓦当部面取り上縁」は上面に加えた強いヨコナデを指し、本文中では瓦当部上面の調整として記述している。特に上縁に面取りを施している固体には○を付している。図版内の矢印は范キズの位置を示している。

なお、有岡城・伊丹郷町遺跡では遺跡名を「CIT」と略して用いていることから、ここでは調査が数次にわたって行われている煩雑さを避けるために、CIT203、217、231を使用している。中世瓦が出土した遺構はCIT203-SK59・SK61・SK63・SK93、CIT217-SD103・SX301・SK208、CIT231-池状遺構・SK31で、そのうちCIT203-SK93とCIT217-SD103は同一遺構である。

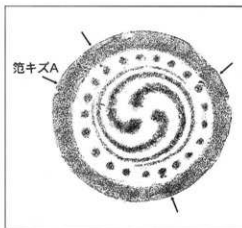
1. 軒丸瓦

今回扱った軒丸瓦の瓦当文様は全て巴文で、巴の巻方向や珠文数などの観察できる特徴から、8種類に分類している。

A類 (NM17～22)

右巻き三巴文軒丸瓦。瓦当径144～147cm、内区径84cm、厚さ16～19cmを測る。内・外区を分ける圏線なし。珠文は21個で、珠文間は一定していない。巴頭は小さく、巴中央に稜線が立つ。圏線に見えるような内区を半周する長い尾を引く。丸瓦部に接合用のキザミ目を入れる製品と、入れない製品があり、瓦当部にはキザミ目を入れない。范への粘土の詰め込み方は、外縁に粘土を入れた後、外縁内部に1～2枚の粘土板を貼り付ける。范キズは観察できる瓦当全てに4カ所確認できることから、使用過程にできた傷ではなく、瓦范の製作当初からついていたものと考えられる。范キズから瓦当と丸瓦部の接合位置を見ると、資料の全ては范キズAを左横に置いた状態を天地として丸瓦部と接合している。規則的に製作できるように范型に何らかの目印が付けられていた可能性が想定できる。瓦当部裏面は平坦にナデ調整を加え、丸瓦部との接合部はナデ調整する。焼成は硬質である。

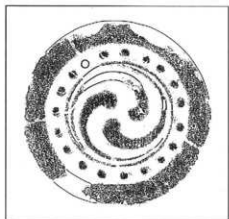
丸瓦部は玉縁Ea類が接合する(玉縁Ea類参照)。



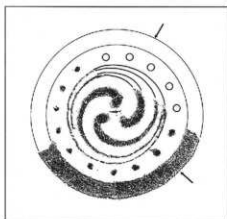
第165図 軒丸瓦A類

B類 (NM1・23～26)

左巻き三巴文軒丸瓦。瓦当径153～156cm、内区径8.7cm、厚さ1.9～2.6cmを測る。内区を分ける圏線あり。珠文は19個で、珠文間は一定していない。巴の上面はナデで押えられ、稜線が目立たなくなっている。尾は圏線に付かない。中心に范作用のコンパス針痕を残すものがある。丸瓦部・瓦当ともに接合面にキザミ目を入れない。范への粘土の詰め込み方は、外縁に粘土を入れた後、外縁内部に2



第166図 軒丸瓦B類



第167図 軒丸瓦C類

～3枚の粘土板を范型に詰め込んでいる。

瓦当裏面は中央を不定方向に、下半は横方向にナデ調整を施す。平坦に仕上がっているが、粘土を詰めた時の指頭圧痕を残す。丸瓦部との接合部はナデ調整する。

丸瓦部は玉縁Q類が接合する（玉縁Q類参照）。

C類 (NM27)

左巻き三巴文軒丸瓦。瓦当径138 cm、内区径8.1 cm、厚さ1.5～1.7 cmを測る。内区を分ける圏線あり。珠文は15個で、珠文間は広く、一定していない。巴は小さく巻き込む。巴頭は小さく、鉤状に尖っている。内区を半周する長い尾を引き、圏線には付かない。丸瓦部・瓦当ともに接合面にキザミ目を入れる。范への粘土の詰め込み方は、外縁に粘土を入れた後、外縁内部に粘土板を貼り付ける。瓦当裏面は中央を不定方向に、下半は横方向にナデ調整し、外縁をナデ回している。范キズは2カ所確認できる。

D類 (NM2・3・6～13・28)

左巻き三巴文軒丸瓦。瓦当径13.5～14.2 cm、内区径8.2～8.4 cm、厚さ1.3～1.6 cmを測る。内区を分ける圏線あり。珠文は19個で、珠文間は一定している。巴は小さく巻き込み、巴の内側に稜線が立つ。尾は圏線に付かない。丸瓦部に接合用のキザミ目を入れるものと、入れてないものがあり、その割合は8：2である。范への粘土の詰め込み方は、外縁に粘土を入れた後、外縁内部に粘土板を貼り付ける。

范キズは観察できる瓦当全てに5カ所確認できることから、使用過程にできた傷ではなく、瓦范の製作当初からついていたものと考えられる。范キズから瓦当と丸瓦部の接合位置を見ると、資料は范キズAを左横に置いた状態を天地として丸瓦部と接合している。規則的に製作できるように范型に何らかの目印が付けられていた可能性が想定できる。瓦当裏面はナデ調整して平坦に仕上げ、粘土を詰めた時の指頭圧痕を残す製品もある。丸瓦



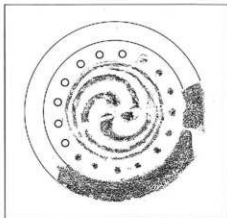
第168図 軒丸瓦D類

との接合部は丁寧にナデ調整する。焼成は硬質で、須恵質に焼き上がっているものが多い。丸瓦部は玉縁P類が接合する（玉縁P類参照）。

E類 (NM4・14)

左巻き三巴文軒丸瓦。瓦当径14.2 cm、内区径7.7 cm、厚さ1.8～2.1 cmを測る。内区を分ける圏線あり。珠文は17個で小粒、珠文間は一定していない。巴は小さく凝縮し（内区が狭い）、巴頭は小さく中央に寄っている。尾は圏線に付かない。丸瓦部・瓦当ともに接合面にキザミ目を入れていない。瓦当外縁に面取りを施すものが若干みられる。

范への粘土の詰め込み方は、外縁に粘土を入れた後、外縁内部に2～3枚の粘土板を范型に詰め込んでいる。瓦当裏面は平坦にナデ調整しているが、粘土を詰めた時の指頭圧痕を残す。丸瓦部との接合部はしっかりとナデ調整する。玉縁R類に接合する（玉縁R類参照）。



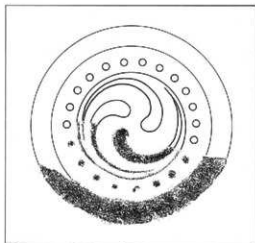
第169図 軒丸瓦E類

F類 (NM15)

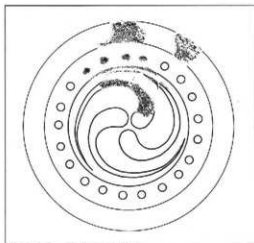
左巻き三巴文軒丸瓦。瓦当径16.0 cm、内区径8.5 cm、厚さ2.0 cmを測る。内・外区を分ける圏線あり。珠文は22個で、大きさ、珠文間は一定していない。巴はやや大振りで、短い尾を引く。尾は圏線に付かない。范への粘土の詰め込み方は、先に外区に粘土を入れた後、外縁に粘土を入れ、外区内部に2～3枚の粘土板を詰め込んでいる。瓦当裏面は中央を不定方向に、下半は横方向にナデ調整している。

G類 (NM5)

左巻き三巴文軒丸瓦。内区を分ける圏線あり。珠文は大粒で、珠文間は一定していない。巴は大振り、尾は圏線に付いている。丸瓦部・瓦当ともに接合面にキザミ目を入れない。范への粘土の詰め込み方は、外縁に粘土を入れた後、外縁内部に2～3枚の粘土板を范型に詰め込んでいる。資料の残りが悪く、その他の詳細は不明。



第170図 軒丸瓦F類



第171図 軒丸瓦G類

H類 (NM16)

小型の左巻き三巴文軒丸瓦。瓦当径12.3cm、内区径6.6cm、厚さ1.7cmを測る。内・外区を分ける圏線は二重にめぐり、外区圏線を持つ。珠文は小粒で、密に30個廻っている。珠文には范キズが少なくとも2ヵ所認められる。巴は中央に小さく凝縮している。巴頭は小さいカギ状にとがり、中央に寄っている。巴頭は押さえ付けられて扁平になっている。巴の尾は圏線に接していない。范への粘土の詰め込み方は、外縁に粘土を入れた後、外縁内部に粘土板を貼り付ける。丸瓦との接合部には粘土を継ぎ足して、丁寧にナデ調整を加えている。瓦当裏面はヨコナデ調整し、粘土を詰め込む際の指頭圧痕が残る。H類だけは側面接合部の下面観がバチ形を呈しておらず、真直ぐに瓦当部に接している。焼成は硬質である。玉縁S類に接合する(玉縁S類参照)。



第172図 軒丸瓦H類

2. 軒平瓦

軒平瓦は瓦当文様から宝珠唐草文軒平瓦(A類)、半截菊花水波文軒平瓦(B類)、半截菊花均整唐草文軒平瓦(C類)、半截菊花唐草文軒平瓦(D類)、連珠文軒平瓦(E類)の5種類に分類できる。A類、B類は観察できる特徴からさらに細分している。

A I 類 (NH34)

宝珠唐草文軒平瓦である。右半分が残っていないため全容は不明であるが、両脇の逆八の字支葉を伴う宝珠文を中心飾りとし、唐草は左右に4回反転する。第1支葉の周囲に輪郭線を伴い、瓦当文様は細い線で表現されている。内・外区に圏線を持っている。顎貼り付け式段で、平瓦部が瓦当外縁を形成している。平瓦部に接合用のキザミ目を入れる。瓦当部厚さ3.1cm、瓦当高5.1cm、上部外縁幅0.7cmを測る。瓦当部上面を1.1cm幅で強くヨコナデ調整しており、顎後縁に面取りを施す。瓦当部には離れ砂が付着している。平瓦凸面はタテナデの後、瓦当部周辺を丁寧にヨコナデ調整している。平瓦凹面はタテナデの後、丁寧にヨコナデを加え、側縁に滑り止め用の縦棧を付ける。平瓦凹凸両面に離れ砂が僅かに確認できる。焼成は硬質である。



第173図 軒平瓦A I 類

A II 類

宝珠唐草文軒平瓦である。宝珠文を中心飾りとし、唐草は左右に5回反転する。宝珠文両脇の逆八の字支葉は消失し、第5支葉の先端は二又になっている。内・外区に圏線を持つが、宝珠両脇で圏線が途切れる。瓦当部には離れ砂が付着している。顎貼り付け式段で、接合線が文様区上半に残る製品と平瓦部が瓦当外縁を形成している製品の2種類が見られる。平瓦部に接合用のキザミ目を入れる。滑り止め用の縦棧・横棧が付いており、貼り付け位置にはあらかじめ接合用のキザミ目を入れている。横棧は中央がかなり低くなっており、同一幅の粘土板を貼り付けた後、中央付近を押さえ込むようにヨコナデ調整している。平瓦部凹凸面には離れ砂が付着している。A II a、A II b、A II c、A II d類に細分類する。

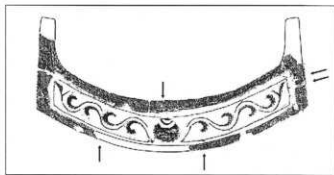
A IIa類 (NH1・2・4・5・11~15・18・19)

小型の宝珠唐草文軒平瓦である。全長26.5~28.5cm、上弦幅21.3~22.7cm、下弦幅21.6~22.2cm、瓦当部厚さ1.9~2.9cm、瓦当高3.8~4.5cm、上部外縁幅0.6~0.9cm。瓦当部上面は0.7~1.2cm幅を強くヨコナデすることで明瞭な面を作っている。瓦当下縁と顎後縁を面取りするもの、顎後縁だけ面取りするもの、両方面取りをしないもの3種類がみられる。基本的に平瓦部には接合用のキザミ目を入れている。キザミ目を入れないものが数点見られるが、面取りの有無と連動はしていない。范キズは5カ所にある。

滑り止め用の縦棧・横棧を付けるが、顎後縁に面取りを施しているものの中に横棧を持たないものが数点見られる。前者の平瓦部凸面はタテナデの後、横棧前方をヨコナデ、後方は接合面を丁寧にタテナデする。側縁はタテナデ、狭端縁は面取りする。瓦当寄りに凹型調整台の木目痕、離れ砂が残る。後者はタテナデを施し、狭端縁を面取りする。瓦当寄りに凹型調整台の木目痕、離れ砂、指頭圧痕が残っている。共に瓦当部は丁寧にヨコナデ調整を施す。

平瓦部凹面はタテナデの後、丁寧にヨコナデ調整を加える。縦棧を貼り付け、接合周囲をタテナデする。側縁に面取り、瓦当上面に面取り状の強いヨコナデを施す。離れ砂が残る。上位に釘穴1カ所。焼成は硬質である。

他に隔用の軒平瓦 (NH15) がある。顎後縁を面取りし、平瓦部凹面側縁に水返し用の浅い縦棧が付く。上位に水返し用の湾曲する凸帯を設け、釘穴1カ所を穿つ。左奥に斜めに半載した接合面が残っている。



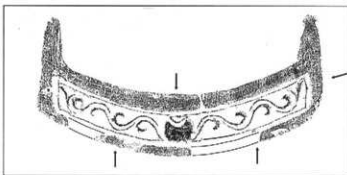
第174図 軒平瓦A IIa類

A IIb類

范キズの位置と調整技法、法量の違いにより、さらにA IIb-1、A IIb-2類に細分している。

A IIb-1類 (NH24~27)

全長29.0~30.4cm、上弦幅22.3~22.9cm、下弦幅22.8~23.3cm、瓦当部厚さ2.7~4.5cm、瓦当高4.4~5.3cm、上部外縁幅0.8~1.7cm。瓦当部上面は0.9~1.6cm幅でヨコナデし、顎後縁は面取りしない。1点だけ瓦当下縁と顎後縁を面取りする製品があるが、完存せず詳細は不明。范キズは4カ所にある。



第175図 軒平瓦A IIb-1類

平瓦部凸面はタテナデの後、広端側・横棧周辺をヨコナデ調整する。側縁をタテナデし、狭端縁を面取りする。離れ砂、布目痕、瓦当寄りに凹型調整台痕が残る。瓦当側縁・裏面はヨコナデを施すが、布目痕が残るものも見られる。平瓦部凹面はタテナデの後、丁寧にヨコナデ調整する。縦棧を貼り付け、接合周囲をタテナデする。側縁に面取り、瓦当上面に面取り状のヨコナデを施す。離れ砂、広端側に凸型調整台痕が残る。上位に釘穴1カ所。焼成はA IIa類に比べて軟質。

AⅡb-2類 (NH28~30)

AⅡb-1類と同系で隅瓦に使用されている。瓦当面前端から斜めに半載した2枚の隅用軒平瓦を斜辺で接合しており、瓦当先端の隙間には粘土を詰めて塞ぎ、表面を平滑に仕上げる。接合面にキザミ目はいれない。

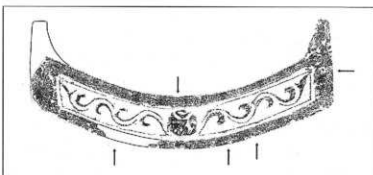
全長26.6 cm、接合部(斜辺)の長さ30.6 cm、上弦幅24.0~24.5 cm、下弦幅24.3~24.7 cm、瓦当部厚さ3.0~4.0 cm、瓦当高4.4~4.8 cm、上部外縁幅0.8~1.3 cm。范キズが5カ所に確認できる。

左右脇区幅は隅瓦の左右で異なり、向かって左側の瓦の左脇区幅は1.4 cm、右2.6 cm、右側の瓦の左脇区幅は2.2~2.6 cm、右1.4~1.5 cmである。瓦当文様幅はAⅡb-1類と同じであるが、両脇区幅が広いので、上・下弦幅は広くなっている。瓦当部上面は0.7~0.8 cm幅でヨコナデを施して明瞭な面を、顎裏面を強くヨコナデすることで顎後縁に0.3~0.7 cm幅の面を残している。

平瓦部凸面はタテナデ調整するが、布目痕をナデ消しきれていない。広端側を約2 cm幅で丁寧にヨコナデする。離れ砂、指頭圧痕、瓦当寄りに凹型調整台痕が残る。瓦当側縁・裏面はヨコナデ調整するが、裏面に布目痕が残る。

平瓦部凹面はヨコナデ調整した2枚の瓦を接合した後、斜辺に沿ってタテナデ、側縁には水返し用の浅い縦線を付け、ヨコナデする。

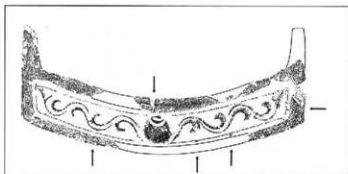
瓦当部上面に面取り状のヨコナデを施す。最後に凸面側の接合部に接着用の粘土を薄く塗り付けて仕上げる。上位に釘穴1カ所ずつ穿つ。焼成はAⅡb-1類と同じ。



第176図 軒平瓦AⅡb-2類

AⅡc類 (NH31~32)

AⅡb-1類と同系であるが、范の湾曲が異なり扁平な感じを受ける。全長29.7 cm、上弦幅22.8 cm、下弦幅22.9 cm、瓦当部厚さ3.1~3.7 cm、瓦当高4.5~4.7 cm、上部外縁幅1.1~1.3 cm。瓦当部上面は0.7~1.4 cm幅で強くヨコナデ調整を加える。顎後縁は面取りしないもの、0.2 cm幅で面取りするもの、裏面に指オサエや強いヨコナデを加えることで顎後縁に0.3~0.7 cm幅の面取り状の面を残しているものの3種類に分かれる。范キズは5カ所に確認。

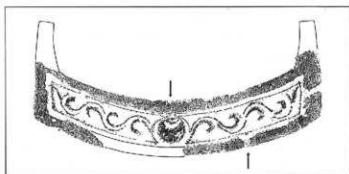


第177図 軒平瓦AⅡc類

平瓦部凸面はタテナデ調整した後、横棧から前をヨコナデする。側縁をタテナデし、狭端縁の面取りを施す。瓦当寄りに凹型調整台痕、離れ砂、布目痕が残る。瓦当側面・裏面はヨコナデしているが、布目痕が消えずに残っている。平瓦部凹面は丁寧なヨコナデ調整した後、縦線を貼り付け、接合付近をタテナデする。側縁に面取り、瓦当部上面に面取り状のヨコナデを施す。離れ砂と広端側に凸型調整台痕が残る。上位に釘穴1カ所。焼成はAⅡb-1類と同じ。

AⅡd類 (NH33)

AⅡb-1類と同系であるが、中心飾り宝珠文の周囲に輪郭線を伴うことから、オリジナルの宝珠唐草文軒平瓦であると考える。全長29.5cm、上弦幅22.6cm、下弦幅22.8cm、瓦当部厚さ4.2cm、瓦当高4.8cm、上部外縁幅1.1cm。瓦当部上面は1.2cm幅で強くヨコナデを加えて、顎後縁は0.4~0.9cm幅で面取りする。范キズは2カ所。



第178図 軒平瓦AⅡd類

平瓦部凸面はタテナデの後、横棧から前半分はヨコナデ、後の接着部分をタテナデする。側縁をタテナデし、狭端縁に面取りを加える。瓦当部はヨコナデ調整、瓦当寄りに凹型調整台痕が残る。

平瓦部凹面はタテナデの後、ヨコナデ調整する。縦棧を貼り付け、接合付近と側縁をタテナデする。周縁部に面取り、瓦当上面に面取り状のヨコナデを施す。瓦当寄りに凸型整形台の木目痕、離れ砂が残る。上位に釘穴1カ所。焼成はAⅡb-1類と同じ。

B類 (NH10・16・17・22・23)

半截菊花水波文軒平瓦。七葉の半截菊花文を中心飾りとし、左右に水波文と半截菊花文を配す。

瓦当貼り付け式段顎で、接合線は瓦当部上面から顎屈曲部にかけて斜めに入る。接合面にキザミ目を入れない。瓦当部上面は0.6~1.0cm幅で強くヨコナデを加え、明瞭な面を作っている。瓦当外縁は丁寧にケズリ調整を施し、平滑に仕上げている。瓦当部、平瓦部凹凸面に離れ砂を撒く。范の違いで2種類に分類する。

Ba類 (NH10・22)

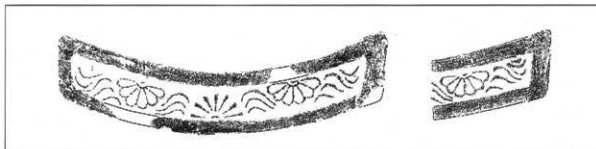
右端の上向き水波文が2本の軒平瓦である。水波文は太く、立体的に表現されている。

上弦幅25.5cm、下弦幅26.0cm、瓦当部厚さ2.4~2.9cm、瓦当高5.0~5.4cm、上部外縁幅1.0~1.2cm。瓦当部に離れ砂が付着する。瓦当下縁と顎後縁を面取りするもの、瓦当下縁を面取りしないもの、両方とも面取りしないものが見られる。平瓦部凸面はタテナデ、瓦当側縁・裏面はヨコナデ調整を施す。瓦当寄りに凹型調整台痕、指頭圧痕、離れ砂は瓦当側縁にも残っている。

平瓦部凹面はタテナデあるいはヨコナデ調整しているが、布目痕がナゲ消されずに残っている。側縁は面取りを行い、瓦当上面にヨコナデを加える。離れ砂が残っている。焼成はBb類に比べて軟。

Bb類 (NH23)

右端の上向き水波文が3本の軒平瓦である。左半分が残っていないため全容は不明。水波文は細く表現され、輪郭線で表現される半截菊花文はBa類より横幅が小さい。瓦当部に離れ砂が付着する。



第179図 軒平瓦Ba・Bb類

瓦当部厚さ3.0cm、瓦当高5.2cm、上部外縁幅1.2cm、瓦当下縁を0.2cm幅で面取りする。平瓦部凸面はタテナデ、瓦当側縁・裏面はヨコナデ調整を施す。瓦当寄りに凹型調整台の木目痕、瓦当側縁に離れ砂が残る。平瓦部凹面はタテナデの後、ヨコナデ調整しているが、布目痕がナデ消されずに残っている。側縁は面取りを行い、瓦当上面にヨコナデを加える。離れ砂が残る。焼成は須恵質で硬質。

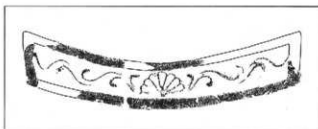
C類 (NH9・21)

半截菊花均整唐草文軒平瓦。花卉を輪郭線で表現する九葉の半截菊花文を中心飾りとし、唐草は左右に5回反転する。唐草の先端が丸く立体的に表現される。両脇区の范型を切り縮めた製品で、第6支葉の先端が途切れている。瓦当部には離れ砂が付着する。軒平瓦と隅用の軒平瓦の瓦当に使用され、細部調整が異なっているので、それぞれで説明する。

軒平瓦 (NH9) は上弦幅22.6cm、下弦幅22.1cm、瓦当部厚さ2.2cm、瓦当高3.7cm、上部外縁幅0.6cm、頸部深さは1.5cmで浅い。瓦当部上面は0.7cm幅で強くヨコナデし、頸後縁を面取りする。瓦当貼り付け式段頸で、接合線は瓦当上縁から頸屈曲部にかけて斜めに入る。接合面にキザミ目を入れない。滑り止め用の縦・横棧を付ける。平瓦部凸面はタテナデ、横棧貼り付け位置から前方をヨコナデ調整、瓦当側面・裏面は丁寧にヨコナデしている。離れ砂が残る。平瓦部凹面はヨコナデ調整した後、縦棧を取り付け、瓦当上面に強いヨコナデを施す。焼成は硬質であるが、隅用に比べて軟。

隅用の軒平瓦 (NH21) は瓦当面左右端部から斜めに半載した2枚の隅用軒平瓦を斜辺で接合するもので、右側の瓦にあたる。瓦当部厚さ2.7cm、瓦当高2.6cm、上部外縁幅0.6cm、頸部深さは2.1cmで浅い。瓦当部上面は1.6cm幅でヨコナデし、端縁に0.2cm幅の面取りを施す。頸後縁を面取りする。瓦当貼り付け式段頸で、接合線は頸屈曲部から真直ぐ平瓦に入る。接合面にキザミ目を入れない。平瓦部凸面はタテナデ、瓦当側面・裏面はヨコナデ調整する。離れ砂、瓦当寄りに凹型調整台の木目痕が残る。

凹面は丁寧にヨコナデ調整し、側縁には水返し用の低い縦棧を付け、さらに水返し用の段と小さく蛇行する凸帯を設け、凸帯際に釘穴を1カ所穿つ。焼成は硬質。

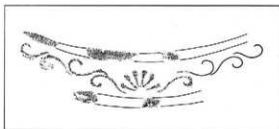


第180図 軒平瓦C類

D類 (NH3・6~8)

半截菊花唐草文軒平瓦。六葉の半截菊花文を中心飾りとし、唐草は左右に4回反転する。唐草の莖は分離気味である。瓦当貼り付け式段頸で、接合線は瓦当部上面から頸屈曲部にかけて斜めに入る。接合面にキザミ目を入れない。瓦当部上面を0.9cm幅でヨコナデするものと、端縁を面取りするものが見られる。瓦当部に離れ砂が付着する。瓦当部

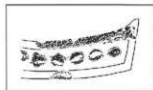
厚さ2.4~2.9cm、瓦当高4.5~4.8cm、上部外縁幅0.8~1.0cm、頸部深さ1.7~1.9cmで浅い。平瓦の厚さは2.5~2.9cmで厚い。平瓦部凸面はタテナデ調整するが、布目痕がナデ消されずに残っている。離れ砂、瓦当寄りに凹型調整台の木目痕が残る。平瓦部凹面はタテナデの後、ヨコナデ調整し、側縁に幅広の面取りを加える。焼成は硬質。



第181図 軒平瓦D類

E類 (NH20)

連珠文軒平瓦。大振りの珠文を配す。完存していないので珠文数は不明。顎貼り付け式段顎である。平瓦凸面に幅広の顎用粘土を貼り付けており、あたかも2枚の粘土板を貼り合せて平瓦を成形したように見える。珠文中央に接合線が入っている。接合面にキザミ目を入れない。瓦当厚さ3.5cm、瓦当高3.2cm、上部外縁幅0.7cm、顎部深さは1.5cmで浅い。瓦当部上面は0.4cm幅で強くヨコナデする。脇区幅は0.6cmを測り大変狭い。平瓦部凸面は瓦当裏面までを丁寧にタテナデ調整し、幅広の側面はヨコナデを施す。凹面はタテナデの後、ヨコナデ調整する。側縁に低い縦棧が付く鱗羽瓦である。右流れ用。焼成は硬質。



第182図 軒平瓦E類

3. 丸瓦

丸瓦は CIT231-池状遺構から良好な状態でまとまって出土しているが、その他の遺構では少量の出土にとどまっており、残存状態も良くなかった。丸瓦には形態として行基式と玉縁式の2種があり、これに法量、観察できる製作・調整技法、湾曲比を加えて分類を試みたところ、大きく19類に分けることができた。行基式丸瓦は一方を細めに作った丸瓦であるが、今回の調査では出土していない。

玉縁式

玉縁A類

玉縁式丸瓦は葺き重ね易いように丸瓦凸面狭端部に段を作るが、玉縁A類は段を作らずに行基式風に仕上げる製品である。法量や調整技法の違いから2種類に細分する。

A1類 (M13)

凸面は縄目タタキの後、幅広のヘラナデ調整を行い、玉縁に当たる部位はヨコナデ調整を行うが、縦位の縄目タタキがナデ消されずにはっきりと残る。玉縁に当たる側縁は幅広く面取りされ、凸面狭端縁のみ僅かに面取りする。側面は1.7cmの幅広の平坦面を呈し、玉縁端面先から一続きで面取りしている。玉縁凹面胴部側縁幅1.8cm、玉縁側は2.1~2.8cmと大きく削る。凹面に布目痕、斜めの糸切り痕が残る。狭端幅14.4cm、厚さ2.4cm、高さ6.7cm。

A2類 (M14)

凸面は大変幅の狭いヘラナデ調整、玉縁に当たる部位はヨコナデ調整して縄目タタキを丁寧にナデ消している。凹凸面狭端縁は面取りする。0.6~0.8cmの幅で側面の面取りを行った後、そのままの幅で玉縁に当たる側縁を面取りしている。凸面胴部側縁幅は1.2~2.0cm。凹面に布目痕、10段の差し縫い痕、斜めの糸切り痕が残る。狭端幅12.8cm、厚さ1.5cm、高さ6.5cm。

玉縁B類 (M26)

凸面は縄目タタキの後、幅広のヘラナデ調整を行う。玉縁側縁の面取りは胴部には及んでいない。玉縁凸端縁は面取りしているが、玉縁凹端縁・凸面狭端縁は面取りしない。側面は2~2.4cmの幅広の明瞭な平坦面を呈している。凹面胴部側縁幅は1.5cm以下であるが、玉縁側は2cmと広がっている。凸面に離れ砂、凹面に布目痕、1段の差し縫い痕、袋綴じ痕、斜めの糸切り痕を残している。玉縁に釘穴を穿つ。体部の厚さ3cm以上、高さ7.9~8.2cm、玉縁の長さ5.5~6.3cm、狭端幅15.4cmを測る。湾曲比0.51。

玉縁C類

凸面はかなり幅広い単位でヘラナデ調整するが、縄目タタキをナデ消しきれていない。玉縁側縁の面取りは胴部に及ばない。凸面狭端縁は面取りせず、玉縁凹・凸両端縁は軽く面取りを加える。側面は1.5cm前後のやや幅広い明瞭な平坦面を呈している。凹面胴部側縁のケズリ幅は2cm程度、玉縁側は2cmを越える。凹面に布目痕、1段の差し縫い痕、袋綴じ痕、斜めの糸切り痕を残す。厚さ2.6～2.9cm、高さ7.7～7.9cm、玉縁広端幅11.3～11.6cmを測り、玉縁の長さでC1、C2、C3類に細分する。

玉縁C1類 (M27)

玉縁の長さは5cm未満、広端幅14.7cm、湾曲比0.54。

玉縁C2類 (M28)

玉縁の長さは6cm未満、広端幅15.5cm、湾曲比0.50。

玉縁C3類 (M29)

玉縁の長さは7cm未満、広端幅15.5cm、湾曲比0.50。

玉縁D類 (M15・16・31・30)

凸面は幅広い単位でヘラナデ調整するが、縄目タタキはナデ消しきれずに残っている。玉縁側縁の面取りは胴部に及ばない。凸面狭端縁は面取りしていないが、玉縁凹・凸両端縁は面取りする。側面は1.4cm前後の平坦面を呈し、凹面胴部側縁幅は1.5～2.5cmである。凹面に布目痕、1～3段の差し縫い痕、袋綴じ痕、斜めの糸切り痕、吊り紐痕Bが残る。吊り紐は0.7～1.0cmの太いもので、小さく蛇行するように布袋に通されている。厚さ2.7～2.8cm、高さ7.0～7.5cmを測る。その他の特徴でD1、D2類に細分する。

玉縁D1類 (M15)

広端幅15cm未満、狭端幅14cm程度、湾曲比0.51。

玉縁D2類 (M16・31)

広端幅15cm以上、狭端幅15cm以上、湾曲比0.47～0.50。

玉縁E類

玉縁E類には軒丸瓦(Ea類)と丸瓦(Eb類)とがある。後者は量や調整技法の違いにより3種類(Eb1～Eb3類)に細分できる。基本的に縄目タタキ後の凸面調整はヘラナデ、玉縁側縁の面取りは胴部まで及ぶ。凸面狭端縁を面取りする製品としない製品の割合は7:3であるが、施されている面取りは幅も狭く目立たない。玉縁凹・凸両端縁は面取りしている。凹面に5～9段の差し縫い痕、斜めの糸切り痕を残している。

Ea類 (M39・40)

軒丸瓦A類に接合する丸瓦である。全長(瓦当部を含む)31.7～33.6cm、玉縁の長さ4.2～5.1cm、玉縁広端幅11.4～12.0cm、広端幅13.4～14.0cm、狭端幅14.3～15.7cm、高さ7.3～8.7cm、凹面胴部側縁幅1.0～2.4cm、側面幅1.0～1.5cm、湾曲比は0.53～0.62である。

凸面のヘラナデ調整は密に施され、縄目タタキが丁寧にナデ消されている。側面幅はE類中もっとも幅広く、明瞭な平坦面をなす。凹面玉縁寄りに滑り止めの横棧を持つ。瓦当接合面にキザミ目を入れる製品と入れない製品がある。

Eb1類 (M33～35)

全長30.6～32.2cm、玉縁の長さ4.3～5.7cm、玉縁広端幅11.1～12.3cm、広端幅14.5～15.8cm、狭端幅

147~158cm、高さ6.8~8.0cm、凹面胴部側縁幅1.3~2.9cm、側面幅0.7~1.2cm、湾曲比は0.46~0.54で幅がある。湾曲比別に各属性の平均値を見ると、湾曲比率が高くなるにつれ高さは増しているが、その他に差異は認められない。

Eb2類 (M36)

全長30.8cm、玉縁の長さ4.7cm、玉縁広端幅11.4cm、広端幅15.0cm、狭端幅14.8cm、高さ7.1cm、凹面胴部側縁幅1.8~2.3cm、側面幅0.7~0.8cm、湾曲比0.47である。凸面は丁寧にタテナデ調整して縄目タタキをナデ消している。側面は幅の狭い平坦面をなす。凹面玉縁寄りだけに板材による内タタキを施す。

Eb3類 (M5・17・37・38)

全長30.9~31.4cm、玉縁の長さ4.3~5.0cm、玉縁広端幅10.7~11.6cm、広端幅13.4~14.0cm、狭端幅13.7~14.9cm、高さ7.0~7.9cm、凹面胴部側縁幅1.7~2.5cm、側面幅0.8~0.9cm、湾曲比は0.50~0.59である。側面は幅の狭い平坦面をなす。凸面のヘラナデの単位幅は狭く、縄目タタキを丁寧にナデ消す。

玉縁F類 (M32)

広端側のみの出土。凸面はタテナデ調整するが、縄目タタキはナデ消しきれずに残る。凹面広端面を何回かに分けて広く(7.4cm)削り込んでいる。凸面と広端面に離れ砂が付着する。広端幅15.6cm、高さ7.3cm、厚さ2.7cm、側面は1.8~2.0cmの丸みのある幅広の平坦面を呈し、凹面胴部側縁幅は1.9cm前後である。湾曲比は0.47。

玉縁G類 (M22・23)

凸面調整のヘラナデの単位幅は狭く、縄目タタキを丁寧にナデ消す。玉縁側縁の面取りは胴部まで及ぶ。凸面狭端縁の面取りは施さず、玉縁凹・凸両端縁は面取りする。凹面に布目痕、7段の差し縫い痕、斜めの糸切り痕、細長い楕円形内タタキ痕が残る。玉縁の長さ3.8cm、広端幅13.4cm、狭端幅13.5cm、厚さ1.8cm、凹面胴部側縁幅1.5~2.1cm、側面は0.4~0.7cmの大変狭い緩斜面を持ち、断面三角形をなしている。湾曲比0.51。

玉縁H類

凹面はヘラナデ調整するが、縦位の縄目タタキがナデ消されずにはっきりと残る。玉縁側縁の面取りは胴部にまで及ぶが、胴部の面取りは僅かである。凸面狭端縁、玉縁凹・凸両端縁は面取りしない。

凹面に斜めの糸切り痕が明瞭に残る。凹面広端面幅は比較的広く、一気に削り込んでいる。全長34.6~35.8cm、玉縁の長さ5.6cm、側面は1.3cm程度の明瞭な平坦面を持つ。その他の法量や調整技法の違いによってH1、H2類に細分する。

H1類 (M2・3)

広端幅13.8~14.1cm、狭端幅14~14.4cm、厚さ2cm程度、凹面胴部側縁幅0.8~1.5cm。玉縁凸面中央を帯状に削り込む製品がある。湾曲比0.44~0.45。

H2類 (M4・24)

広端幅14.7cm、狭端幅14.9cm、厚さ2.6cm、凹面胴部側縁幅1.6~2.3cmで、玉縁側は2.6~2.9cmとより広く削る。玉縁凸面には縄目タタキがナデ消しきれずに残る。湾曲比0.49。

玉縁I類 (M6)

軒丸瓦である。縄目タタキ後の凸面調整は単位幅の狭いヘラナデを丁寧に施す。凹面胴部側縁幅は1.7~2.3cm、側面は0.6~0.9cmの丸みのある狭い平坦面を呈す。凹面に布目痕、袋綴じ痕、8段の差し縫い痕、斜めの糸切り痕が残る。瓦当接合面を残しているが、瓦当は不明である。接合面にキザミ目を入れる。凸面狭端縁、玉縁凹・凸両端縁は面取りしない。凹面玉縁寄りに滑り止めの横棧が付き、玉縁側の接合部を1cm幅で強くヨコナデする。全長30.3cm、玉縁の長さ4.6cm、広端幅13.0cm、高さ7.5cm、厚さ2.1cm、湾曲比0.58。

玉縁J類 (M7・8・18)

凸面は縄目タタキ後、単位幅の狭いヘラナデ調整を行う。玉縁側縁の面取りは胴部にまで及ぶ。

凸面狭端縁は面取りせず、玉縁凹・凸端縁は僅かに面取りを行う。側面は0.6cm程度の丸みのある大変狭い面を呈す。凹面胴部側縁幅1.5~2.1cm、玉縁端面幅は1.2cmと狭い。凹面に布目痕、7~8段の差し縫い痕、斜めの糸切り痕、細長い内タタキ痕が残る。小振りの丸瓦である。全長30.2cm、玉縁の長さ4.7cm、広端幅12.8~13.0cm、狭端幅13.2cm、厚さ2.0cm、高さ7.0~7.3cm、湾曲比0.54~0.57。

玉縁K類

軒丸瓦 (Ka類) と丸瓦 (Kb類) がある。基本的に凸面は単位幅の狭いヘラナデ調整を行うが、縄目タタキをナデ消しされていない。玉縁側縁の面取りは胴部まで及ぶ。凸面狭端縁を面取りしない製品と面取りする製品の割合は6:4である。玉縁凹・凸両端縁は僅かに面取りする。側面は0.7~1.2cmの狭い平坦面を呈し、凹面胴部側縁幅は比較的広い (1.3~2.5cm)。凹面に布目痕、7~8段の差し縫い痕、斜めの糸切り痕が残る。

Ka類 (M9)

凹面玉縁側に滑り止めの横棧が付く。狭端幅13.6cm、玉縁の長さ5.0cm、玉縁広端幅10.2cm、厚さ2.1cm、高さ7.0cm、湾曲比0.54。

Kb類 (M19)

凹面に細長い内タタキ痕が残る製品があり、胴部から玉縁に向けて叩いている。広端幅13.2~13.5cm、狭端幅13.3~14.1cm、玉縁の長さ4.4~4.9cm、玉縁広端幅10.2~10.6cm、厚さ1.9~2.0cm、高さ7.0~7.4cm、湾曲比0.52~0.56。

玉縁L類 (M20)

凸面は単位幅の狭いヘラナデ調整するが、縄目タタキはナデ消されずに残っている。玉縁側縁の面取りは胴部にまで及ぶ。凸面狭端縁、玉縁凹・凸両端縁は面取りする。側面は0.8cmの丸みのある狭い面を持ち、頂部の丸い断面三角形を呈す。凹面胴部側縁幅は2.5cm、玉縁端面幅は3.3cmと広く閉る。凹面に布目痕、袋綴じ痕、7段の差し縫い痕、斜めの糸切り痕が残る。全長30.8cm、玉縁の長さ4.9cm、狭端幅14.5cm、厚さ2.4cm、高さ7.2cm、湾曲比0.51。

玉縁M類 (M21)

凸面は縄目タタキの後、丁寧にヘラナデ調整する。玉縁側縁の面取りは胴部まで及ぶ。凸面狭端縁は面取りせず、玉縁凹・凸両端縁は面取りを施す。側面は0.7cmの丸みのあるかなり狭い面を持ち、頂部の丸い断面三角形を呈す。凹面胴部側縁幅は2~2.5cmと広い。凹面に布目痕、6段の差し縫い

痕、細長い内タタキ痕が残る。玉縁の長さ46cm、狭端幅14.7cm、厚さ2.2cm、高さ7.4cm、湾曲比0.51。

玉縁N類 (M11)

凸面は縄目タタキの後、単位幅の狭いヘラナデ調整を行う。玉縁側縁の面取りは胴部まで及ぶ。凸面狭端縁の面取りはしない。玉縁凹・凸両端縁は僅かに面取りする。側面は0.5 cmの丸みのある大変狭い面を持ち、頂部の丸い断面三角形を呈す。凹面胴部側縁幅は2.4 cmと広い。凹面には布目痕、9段の差し縫い痕、斜めの糸切り痕が残る。玉縁の長さは4.0 cmと短く、狭端幅13.8 cm、厚さ2.1 cm、高さ6.7cm、湾曲比0.50。

玉縁O類 (M1)

凸面は縄目タタキの後、丁寧なヘラナデ調整を行う。玉縁側縁の面取りは胴部まで及ぶ。凸面狭端縁の面取りは行わず、玉縁凹・凸両端縁の面取りは施す。凹面に布目痕、7段の差し縫い痕、大きな楕円形内タタキ痕が残る。側面は1 cm程の丸みのある狭い平坦面を呈し、凹面胴部側縁幅は2.0cm。

玉縁P類

軒丸瓦D類に接合する丸瓦である。凸面は縄目タタキの後、単位幅の大変狭いヘラナデ調整する。側面は1～1.5 cm程度の緩い傾斜面を呈し、凹面胴部側縁幅は1.5 cm前後で、削った後に指オサエを加える。瓦当部裏面の丸瓦部との接合部はナデ調整する。凹面に布目痕、8段の差し縫い痕が残る。広端幅12.8cm、厚さ2.1cm、高さ7.4cm、湾曲比0.58。

玉縁Q類 (M25)

軒丸瓦B類に接合する丸瓦である。接合面にキザミ目を付けない。凸面は縄目タタキの後、丁寧にヘラナデ調整する。凸面に離れ砂が付着している。側面は2.2 cm前後の幅広い平坦面を呈し、凹面胴部側縁幅は0.9～1.3 cmである。凹面に布目痕、袋綴じ痕、5段の差し縫い痕、斜めの糸切り痕が残る。瓦当部裏面の丸瓦部との接合部は丸瓦側に広くナデ調整が及び、その間には横方向の3段の差し縫い痕が残る。全長32.7cm、広端幅14.8cm、厚さ3.0cm、高さ8.1cm、湾曲比0.55である。

玉縁R類 (M10)

軒丸瓦E類に接合する丸瓦である。凸面は縄目タタキの後、丁寧にヘラナデ調整する。凸面の瓦当側に粘土を貼り重ねて、高さを出している様子が分かる。側面は1.5 cmの緩い傾斜面を呈し、凹面胴部側縁幅は1～1.2 cmである。凹面に布目痕、袋綴じ痕、3段の差し縫い痕、斜めの糸切り痕、広端側に指頭圧痕が残る。瓦当部裏面の丸瓦部との接合部はナデ調整する。広端幅12.8cm、厚さ2.3cm、高さ7.0cm、湾曲比0.54。

玉縁S類

軒平瓦H類に接合する丸瓦である。凸面はヘラナデ調整を施しているが、縦位の縄目タタキがナデ消されずに明瞭に残る。側面は1.5 cmの丸みのある平坦面で、凹面胴部側縁は1.0 cm幅を指オサエして形を整えている。凹面には斜めの糸切り痕、布目痕が残る。

4. 平瓦

平瓦はCIT231一池状遺構から比較的良好な状態で多数出土しているが、その他の遺構では数点の出土にとどまっている。残存状態も良くなかったが、法量と観察できる製作・調整技法、湾曲比をもとに大きく6類に分類することができた。

平瓦A類 (H2・5)

全長27.9~28.3cm、厚さ2.0cm、広端部幅21.5~21.7cm、狭端部幅21.2cm、狭端面幅1.6~2.2cm、湾曲比0.14を測る。凸面はタテナデ調整するが、稜線が目立つほど強くナデを加えている。横に走る無文タタキの圧痕、狭端側に凹型調整台痕が残っている。離れ砂が付着。凹面はタテナデの後、丁寧にヨコナデ調整を施し、布目痕をナデ消している。側縁は軽く面取りするが、広端縁の面取りは行わない。離れ砂が付着する。

平瓦B類 (H7)

1点出土するが、完存していない。厚さ1.6cm、狭端部幅21.1cm、狭端面幅1.9cm、湾曲比0.12を測る薄手の掛平瓦である。凸面はタテナデ調整し、離れ砂が残る。凹面はタテナデの後、丁寧にヨコナデ調整を施す。側縁片側に大変短い稜線が付く。側縁を面取りし、狭端面を削る。離れ砂は確認できない。

平瓦C類 (H6)

1点出土するが、完存していない。厚さ2.6cm、残存部位幅24.4cmを測る大型品である。

凸面はタテナデ調整するが、布目痕、糸切り痕がナデ消されずに残っている。指頭圧痕が目立ち、離れ砂が厚く付着する。凹面はタテナデの後、ヨコナデ調整しているが、布目痕がナデ消されずに残る。側縁を軽く面取りする。離れ砂が付着している。

平瓦D類 (H1)

1点出土しているが、完存していない。厚さ1.8cm、広端部幅20.9cm、湾曲比0.15を測る小型品である。凸面は平行タタキの後、ナデ調整しているが、布目痕、斜めの糸切り痕がナデ消されずに残っている。凹面はタテナデの後、ヨコナデ調整する。側縁は軽く面取りし、広端縁を僅かに面取りする。凹凸両面に離れ砂が薄く付着する。

平瓦E類 (H3・4)

2点出土しているが、何れも完存していない。厚さ2.3~2.5cm、広端部幅21.1cm、狭端部幅20.6~21.0cm、狭端面幅1.5~1.9cm、湾曲比0.11~0.12を測る。凸面はタテナデ調整する。指頭圧痕、狭端側に凹型調整台痕が残る。凹面はヨコナデ、タテナデ調整し、側縁は軽く面取りしている。凹凸両面に離れ砂が付着する。

平瓦F類

F類はCIT231一池状遺構出土の平瓦で、凹凸面をナデ調整し、離れ砂が付着する特徴を持つ。凹面広端縁を面取りする幅の広い平瓦Fa-1類・Fa-2類、面取りする幅の狭い平瓦Fa-3類、面取りしない幅広の平瓦Fb類の4種類に細分する。

Fa-1類 (H8~11)

全長28.9~29.7cm、厚さ1.9~2.4cm、広端幅22.2~23.0cm、狭端幅21.1~22.3cm、狭端面幅1.3~2.4cm、湾曲比0.12~0.14。凸面はタテナデ調整し、横に走るハケ状工具の圧痕が見られる。縦に走る圧痕が僅かに観察できるが、無文タタキする板状工具の圧痕と考えられる。広端側あるいは狭端側に凹型調整台痕が残っており、平瓦より一回り小さな調整台を用いて調整・成形していることが分かる。凹面

は側縁、広端縁に面取りを施す。斜めの糸切り痕、離れ砂が厚く残っている。

Fa-2類 (H12)

全長29.5cm、厚さ1.6cm、広端幅23.5cm、狭端幅22.5cm、狭端面幅1.5cm、湾曲比0.13を測る。Aa-1類よりやや幅広く薄手の平瓦である。凸面はタテナデ調整しているが、斜めの糸切り痕をナデ消しきかれていない。狭端側に凹型調整台痕が残る。離れ砂が厚く付着する。凹面はタテナデの後、中央から広端側をヨコナデしている。側縁、広端縁に面取りを施す。離れ砂が薄く残っている。

Fa-3類 (H13・14)

全長28.8~29.9cm、厚さ2.1~2.3cm、広端幅21.4~21.7cm、狭端幅20.9~21.1cm、狭端面幅1.5~1.9cm、湾曲比0.13~0.15を測る。Fa-1類に比べて広端幅と狭端幅が狭い小さめの一類である。

凸面はタテナデ調整を施す。縦・横方向に走る圧痕が観察できるが、叩き締め用の板状工具の圧痕と考えられる。狭端側に凹型調整台痕、指頭圧痕、斜めの糸切り痕が残る。離れ砂が厚く付着する。凹面はタテナデの後、丁寧にヨコナデ調整しているが、布目痕が僅かに確認できる。広端縁に面取りを施す。離れ砂が付着している。

Fb類 (H15~21)

全長28.5~29.8cm、厚さ1.9~2.2cm、広端幅22.1~23.4cm、狭端幅20.8~22.5cm、狭端面幅1.3~2.3cm、湾曲比0.12~0.15を測る。法量はFa-1類と同様であるが、凹面広端縁を面取りしない一類である。凸面はタテナデ調整を施すが、指ナデの他にハケ状工具を使用している。周辺には斜め糸切り痕がナデ消されずに残っている。広端側、狭端側に凹型調整台の弧状の圧痕が認められるが、周囲に圧痕が残っている資料があり、そこから調整台の大きさを推測すると、底辺19.5cm、側縁26.0cm、上縁(弧状)19.0cmとなり、平瓦より一回り小さい台の上で調整、成形作業をしていることが分かる。凹面はタテナデの後、丁寧にヨコナデ調整を施す。側縁には軽く面取りを加える。離れ砂が薄く付着する。

5. まとめ

今回の調査で確認した軒瓦類は、軒丸瓦8類、軒平瓦11類、丸瓦28類、平瓦9類である。軒丸瓦は巴文だけで、巴右巻き一内圏線なし(A類)、巴左巻き一内圏線あり一尾が圏線に付かない(B・C・D・E・F類)、巴左巻き一内圏線あり一尾が圏線に付く(G類)、巴左巻き一内外圏線あり一尾が圏線に付かない(H類)の4タイプに大きく分けることができる。軒平瓦は宝珠唐草文(A類)、半截菊花水波文(B類)、半截菊花均整唐草文(C類)、半截菊花唐草文(D類)、連珠文(E類)があり、半截菊花水波文は2タイプに、宝珠唐草文は6タイプに細分している。

ここでは軒瓦類のセット関係と年代観についてみていく。セット関係は軒瓦類がまとめて出土しているCIT203-SK93、CIT217-SD103とCIT231-池状遺構について検討しよう。同一時期で多量に出土している軒瓦類があれば、セット関係にあると認識することができる。出土量が少ない場合でも、胎土・焼成などに同様な特徴が認められればセット関係にあったと理解することは可能である。

CIT203-SK93、CIT217-SD103からは軒丸瓦D・E・F類、軒平瓦AⅡa・Ba・C・D類、丸瓦は玉縁Eb3・J・K・N・A・D・L・M・G・P・R類、平瓦A・C・E・D類が出土している。

この中で出土量が多いのは軒丸瓦D類と軒平瓦AⅡa類である。軒平瓦はAⅡ類の中でもっとも小振り、焼成が硬質な一類である。軒丸瓦D類は硬質の焼成や白色粘土がマーブル状に混ざる胎土が似通っており、大きさから判断しても、軒平瓦AⅡa類との組み合わせが考えられる。丸瓦では玉縁P類が軒丸瓦D類(NM7・9)の丸瓦部として3点出土しているが、丸瓦単独での出土はなかった。小振り、調整や湾曲比などが似通っている玉縁Eb3・J類が丸瓦として使用されていた可能性もある。

平瓦は凸面に施される調整や白色粘土がマーブル状に混ざる胎土が丸瓦類と似ていることから、完存に近いA類(H2・5)が挙げられる。ここでは軒丸瓦D類-軒平瓦AⅡa類-玉縁P類-平瓦A類をセットとして提示することができる。

軒丸瓦E類と軒平瓦D類は、微砂粒を含みながらも精緻な胎土や、やや軟質な焼成、瓦当や平瓦部に撒かれている細かい離れ砂などに共通の特徴が認められることから、セット関係を提示できよう。

CIT231-池状遺構からは軒丸瓦A・B・C・D類、軒平瓦AⅡb~d・B・C・E類、丸瓦では玉縁Q・B・C・D・F・E類、平瓦F類が出土している。この中で多量に出土しているのは軒丸瓦A類と軒平瓦AⅡb・C類、玉縁E類、平瓦F類である。出土状況から、これらの軒瓦類がセットで葺かれていたことが指摘できる。軒平瓦AⅡb・C類はAⅡa類と同系であるが、一回り大きく、作りも大振りである。焼成はAⅡa類のように硬質のものも見られるが、やや煙しの掛かった軟質なものが大半である。これに組み合わせる他の軒瓦類も総じて上記のセット軒瓦類より大振りで重量感があり、砂粒を含むやや粗い胎土や、焼成にも共通性が認められる。この他に鯉や鬼瓦が出土しており、CIT203-SK93、CIT217-SD103からも宝珠や鬼瓦が出土している。建物によって瓦の大きさや用いられる瓦の種類は異なっているので、寺院内の建物を推測する手掛りとなるであろう。軒瓦類には煤けた状態の個体も見受けられ、出土層内からは瓦に混じって炭も検出されていることから、瓦葺き建物が火災に遭い、焼けた軒瓦類を廃棄したことが窺える。しかし、瓦表面にはガラス質化する様な変質は確認できないので、高温に晒される火災ではなかったと推測される。

セット関係としてさらに軒丸瓦B類と軒平瓦Ba類が指摘できる。細かい白色粒を含んだ精緻な胎土や、土師質に焼結まっている焼成状態、そして側縁に加えられる調整などに共通性が認められ、同一時期と考えている。



第183図 軒丸瓦と軒平瓦の組み合わせ (S=1/4)

このように遺構出土の軒瓦類のセット関係を提示したが、次に、軒瓦は瓦当文様や接合方法、そして顎部形態から、丸瓦・平瓦は凹凸面の調整方法や湾曲比などから時期的特徴を捉えて、組み合わせによる軒瓦類の年代観について提示する。先学により(註1)、軒平瓦において顎貼り付け技法が再び採用される時期は15世紀末とされており、軒平瓦が「瓦当貼り付け」であるならば、1260～1495年の間であることは妥当としている。今回扱った軒平瓦をその基準に当てはめてみると、瓦当貼り付け技法で半截菊花文を中心飾りとする一群と、顎貼り付け技法で宝珠唐草文を中心飾りとする一群に二分することができ、それぞれ1495年以前と以降の大まかな年代が与えられる。

前者の軒平瓦をセット関係とするものは、先ず軒丸瓦E類と軒平瓦D類である。D類と同文のものは確認できていないが、類似したものが法隆寺にみられ(註2・註3)、1430～1490年の年代が与えられている。D類は七葉の半截菊花文を中心飾りとし、左右に唐草が4反転するシンプルな瓦当文様を持つが、法隆寺例に比べると唐草の巻き込みは弱く、より簡素化されている。軒丸瓦E類は瓦当・丸瓦部に接合時のキザミ目を付けていないが、瓦当外縁外側の面取りが低傾度で施されていることなどから、15世紀後半頃の組み合わせと考える。

次に軒丸瓦B類と軒平瓦Ba類である。軒平瓦Ba類は七葉の半截菊花文を中心飾りとし、左右に水波文と花弁を輪郭線で表現する六葉の半截菊花文を配している。B類は15世紀前半頃に盛行していた半截菊花文軒平瓦の流れを汲むもので(註4)、すでに内外区画線は失われており、瓦当外縁は丁寧なケズリ調整を施し平滑に仕上げられている。同文のものは確認できていないが、法隆寺(註5)、加西市一乗寺、姫路市書写・円教寺(註6)で同類の軒平瓦が出土している。文様構成では一乗寺や円教寺の軒平瓦に類似しており、同時期頃の可能性が考えられる(註7)。軒丸瓦Bは瓦当・丸瓦部ともに接合面にキザミ目を入れず、瓦当外縁外側に面取りを施さないものである。軒瓦の特徴から15世紀中葉頃の組み合わせと考えられる。

後者の軒平瓦をセット関係とするものは、先ず軒丸瓦D類と軒平瓦AⅡa類である。軒平瓦AⅡ類は一見して分かる通り、唐草の第5支葉が二又に別れ、内外区画線が廻るという特徴を持っている。今のところ同文のものを確認していないが、二又に分かれる支葉を持つ宝珠唐草文軒平瓦は兵庫県神崎郡作門寺跡(七種寺跡)(註8)、円教寺常行堂(註9)で出土している。

軒丸瓦D類と軒平瓦AⅡa類はともに丸瓦や平瓦の接合部分にキザミ目を入れるものと、入れないものがあり、その割合は8:2であるが、キザミ目を持つものが圧倒的に多い。瓦当にはキザミ目の有る無しに拘る時間差は感じられず、新たな接合技法が定着してきた時期に当たっていると思われる。

丸瓦には玉縁P・Eb3・J類があり、玉縁凹・凸両端面は面取りを施し、凸面狭端縁の面取りは高傾度で行っている。玉縁側縁の面取りが胴部まで及び、凸面の縄目タタキは丁寧にナデ消されているなど、15世紀後半以降の特徴を示している。丸瓦の湾曲比は0.50～0.59と高さがあり、0.50を割る丸瓦はない。時期を想定する前に同系の軒平瓦を持つもう一つの組み合わせを考察しておく。

軒丸瓦A類と軒平瓦AⅡb・c類である。軒平瓦の文様はAⅡa類と同様の特徴を持っている。

軒丸瓦の丸瓦部にはキザミ目を入れるものと、入れないものがあり、その割合は6:4である。軒丸瓦D類に比べてキザミ目を入れるという接合技法の浸透はより過渡的に見える。しかし、軒平瓦は全てにキザミ目を施していることから、接合技法の転換は軒平瓦の方が先んじて行われ、軒丸瓦がその変化に追隨していったようすが窺える。そう考えると、同系の軒平瓦の場合、軒平瓦の接合部分にキザミ目が施される割合が、その新旧を決める手がかりとなるかもしれない。軒丸瓦に関して言えば、内圏線は消失しているが、巴の尾は内区を1周近く廻る長い尾を引いている。珠文は21個が廻り、瓦当外縁高は1.0～1.4cmを測るなど、軒丸瓦D類に比べてやや古相を呈しているところが認められる。

しかし、軒平瓦AⅡa類とAⅡb・c類の瓦当文様には目立った変化は認められないが、AⅡb・c類では前述したように接合部には全てにキザミ目が施してあることから、AⅡa類とは若干の時間差があるように思われる。さらに丸瓦E類の湾曲比は0.46～0.59で、0.50を割るものが出ており、平瓦Fの湾曲比は0.12～0.14で、平瓦Aと比べて湾曲が弱まってきている。軒丸瓦A類とは逆に、それ以外の軒瓦は新しい様相を示しているといえる。

以上の軒瓦類の様相から、軒丸瓦D類を基本とする組み合わせは、軒平瓦に顎貼り付け技法が採用された15世紀後期末以降の時期と考えられる。そして軒丸瓦A類を基本とする組み合わせの方がそれよりも若干時期が下るものと思われる。

池状遺構では埋土上層から丸瓦部・瓦当ともに接合面にキザミ目を入れている軒丸瓦C類や、鉄線切り痕の残る丸瓦が出土しているが、出土状況から差し替え瓦とは考えていない。これらの軒瓦は16世紀後半と推測できる。

他にCIT217・SK208出土の軒瓦類を紹介しておく。軒丸瓦H類は内外区圏線が廻る、側面接合部下方面観がバチ形を呈していない、巴の頭どうしが密接し先端が尖るなど鎌倉後期の特徴を持っている(註10)。しかし、供伴する軒平瓦はAⅡa類で、鬼瓦はSD103出土の鬼瓦(192)と接合関係にあり、他に面戸瓦(185)、雁振り瓦が出土している。鎌倉後期頃に建てられた寺院が近辺に存在していたのか、あるいは軒平瓦AⅡa類は15世紀後半末以降の年代観が与えられているので、軒丸瓦H類は復古瓦とも考えられるが、1点のみの出土であるため言及は避けておきたい。

以上のようにセット関係にある軒瓦の年代観について考察を行った。軒平瓦について言えば、瓦当文様は大和の影響を受けていることは間違いないが、それ以上に播磨に進出した大和系瓦工人との関係を、距離的なことも考慮して、より重要視するべきであろう。ただ、今回扱った軒平瓦には同系と認識できるものが大和や播磨には見られなかった。それらを参考に「オリジナル」瓦范と判断してよいならば、持ち込まれた軒瓦類ではなく、工人が移動して、供給先(ここでは寺院)近隣で造瓦作業を行っていたことが想定できる。これまで有岡城・伊丹郷町遺跡に関しては中世瓦の空白地と思っていたが、このようにまとまって出土したことで遺跡の新たな一面を考察する機会が与えられ、軒瓦については他地域との比較・検討を試みる事ができた。今後、新たな資料を整理する際の布石になれば幸いである。

(瀬川眞美子)

註1 山崎信二『中世瓦の研究』2000年

註2 註1に同じ。一本の内彫りの単線で菊花の花弁を表現するものの中で、左右が唐草文だけのものは、中世VI期後半(1400～1430年)に法隆寺272Eaに使用され、范を切り縮めて再使用された272Ebは中世VII期(1430～1490年)としている。

註3 法隆寺昭和資材帳編集委員会『昭和資材帳15 法隆寺の至宝 瓦』1992年

註4 註1に同じ

註5 註1に同じ。「法隆寺272Hや薬師寺出土例があり、何れも瓦当外区は削りによって仕上げている」。法隆寺272Hは中世VII期(1430～1490年)の瓦であるとしている。

註6 田中幸夫『播磨の中世瓦』2004年

註7 註1に同じ。「円教寺例も二次調整の念込さから、法隆寺272Hや薬師寺出土例のグループに入る可能性が有り、円教寺大講堂修理報告書が提示した永享から寛正頃(1440～1462)の瓦となりうる」とされているが、「法隆寺272Hに類似するというより、むしろ明徳四年(1393)の報恩寺例と法隆寺272Hとの中間的な文様と見てよいであろう」としている。

註8 註6に同じ

註9 註1に同じ。円教寺例は舞台の化粧棟木の「中門作事上棟寛正四年」銘や、宝珠唐草文の大和との比較から、円教寺例のような宝珠文両脇の文葉が消失し、唐草の巻きの輪郭線が半分程度残るものを1460年代としても矛盾は生じないとしている。

註10 法隆寺昭和資材帳編集所『伊河留我 法隆寺昭和資材帳調査概報 10』1989年

軒丸瓦

番号	通称名	瓦					瓦			瓦			備考	類							
		形状	形状	形状	形状	形状	高さ	厚さ	全長	瓦	瓦	瓦									
		内径	外径	高さ	厚さ	全長	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦									
NM1	CT203 SK59	左三巴	0	(15.5)	2.4	—	(19)	0.9	1.2	1.9	X	X	—	—	CT203—池田調(旧)と同。凹面に8段の差縁 い無。差縁し無。玉縁部の軒丸瓦	B					
		左三巴	0	13.6	1.3	2.5	—	0.9	0.9	1.6	X	—	—	—	瓦式あり。SK93と同	D					
		左三巴	0	—	1.4	2.3	(19)	0.9	0.9	1.4	X	0	—	—	瓦式あり。SK93と同か?	D					
NM4	CT203 SK61	左三巴	0	14.2	1.8	2.8	17	0.7	1.2	1.6	X	0	—	12.8	8.2	2.8	—	差縁し無。凹面は8段の差縁あり。凹面は中水で覆つ ている。棟文が一定していない。CT217— SD103NM7と同	E		
		左三巴	0	(16.8)	2.6	—	—	1.0	1.4	1.7	X	0	—	—	—	—	—	—	凹面は8段の差縁あり。凹面は中水で覆つ ている。棟文が一定していない。CT217— SD103NM7と同	C	
NM5	SK63	左三巴	0	(14.2)	1.4	2.6	—	0.8	0.9	1.4	X	0	—	—	—	—	—	—	瓦式あり。SK93と同か?	D	
		左三巴	0	13.8	1.3	2.2	19	0.8	0.9	1.7	X	0	—	13.0	8.8	2.5	—	—	瓦式あり。凹面は8段の差縁あり。凹面は中水で覆つ ている。棟文が一定していない。CT217— SD103NM7と同	D	
NM7	CT203 SK03	左三巴	0	13.6	1.3	—	19	0.8	0.8	1.7	X	0	—	—	—	—	—	—	瓦式あり。凹面は8段の差縁あり。凹面は中水で覆つ ている。棟文が一定していない。CT217— SD103NM7と同	D	
		左三巴	0	14.0	1.6	2.3	19	0.8	0.9	1.5	X	0	—	12.8	8.4	2.7	—	—	瓦式あり。凹面は8段の差縁あり。凹面は中水で覆つ ている。棟文が一定していない。CT217— SD103NM7と同	D	
NM10	NM11	左三巴	0	13.8	1.5	2.6	19	0.8	0.9	1.6	X	0	—	—	—	—	—	—	瓦式あり。凹面は8段の差縁あり。凹面は中水で覆つ ている。棟文が一定していない。CT217— SD103NM7と同	D	
		左三巴	0	13.6	1.6	—	(19)	0.9	1.0	1.6	X	0	—	2.3	—	—	—	—	瓦式あり。凹面は8段の差縁あり。凹面は中水で覆つ ている。棟文が一定していない。CT217— SD103NM7と同	D	
NM12	CT217 SD103	左三巴	0	13.5	1.3	2.2	19	0.7	1.0	1.5	X	0	—	—	—	—	—	—	瓦式あり。凹面は8段の差縁あり。凹面は中水で覆つ ている。棟文が一定していない。CT217— SD103NM7と同	D	
		左三巴	0	13.5	1.4	2.2	19	0.9	0.9	1.7	X	0	—	—	—	—	—	—	瓦式あり。凹面は8段の差縁あり。凹面は中水で覆つ ている。棟文が一定していない。CT217— SD103NM7と同	D	
NM14	NM15	左三巴	0	—	2.1	—	—	0.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	瓦式あり。凹面は8段の差縁あり。凹面は中水で覆つ ている。棟文が一定していない。CT217— SD103NM7と同	E	
		左三巴	0	(16.0)	2.0	2.8	(22)	0.8	1.3	1.9	X	0	—	—	—	—	—	—	瓦式あり。凹面は8段の差縁あり。凹面は中水で覆つ ている。棟文が一定していない。CT217— SD103NM7と同	F	
NM16	CT217 SK208	左三巴	0	12.3	1.7	—	30	0.5	1.3	1.4	X	0	—	—	—	—	—	—	瓦式あり。凹面は8段の差縁あり。凹面は中水で覆つ ている。棟文が一定していない。CT217— SD103NM7と同	H	
		右三巴	X	—	1.6	—	(21)	0.9	1.2	2.0	X	0	—	—	—	—	—	—	瓦式あり。凹面は8段の差縁あり。凹面は中水で覆つ ている。棟文が一定していない。CT217— SD103NM7と同	A	
NM18	CT211 池田調	右三巴	X	14.6	1.9	2.6	(21)	0.9	1.3	1.7	X	0	—	32.2	15.5	7.3	2.1	0	0	瓦式あり。凹面は8段の差縁あり。凹面は中水で覆つ ている。棟文が一定していない。CT217— SD103NM7と同	A
		右三巴	X	14.1	2.0	2.6	21	0.9	1.1	1.7	X	0	—	32.7	14.2	8.5	2.7	0	0	X	瓦式あり。凹面は8段の差縁あり。凹面は中水で覆つ ている。棟文が一定していない。CT217— SD103NM7と同
NA20	NM21	右三巴	X	14.3	2.3	2.6	21	0.9	1.2	2	X	0	—	32.4	14.5	7.7	2.3	0	—	瓦式あり。凹面は8段の差縁あり。凹面は中水で覆つ ている。棟文が一定していない。CT217— SD103NM7と同	A
		右三巴	X	13.9	1.7	2.6	21	0.9	1.2	1.6	X	0	—	32.4	14.5	7.0	2.0	0	0	X	瓦式あり。凹面は8段の差縁あり。凹面は中水で覆つ ている。棟文が一定していない。CT217— SD103NM7と同

第34表 瓦観察表(1)

軒丸瓦

番号	通称名	瓦当部				互当部		外縁部		裏取部		丸瓦部		組合部	備考	類	遺物番号		
		紋様	高さ	厚さ	幅	内縁	外縁	内縁	外縁	高さ	厚さ	幅	高さ					厚さ	幅
NK20	右三巴	×	14.3	2.3	2.6	21	0.9	1.2	2	×	○	324	14.5	7.7	2.3	○	—	寛平文あり、折付瓦、出面に弓形の差し懸い痕あり	第132回-116 図662-116
NK21	右三巴	×	13.9	1.7	2.6	21	0.9	1.2	1.6	×	○	324	14.5	7.0	2.0	○	×	寛平文あり、折付瓦、出面に弓形の差し懸い痕あり	第132回-116 図662-116
NK22	右三巴	×	14.0	2.1	2.5	21	1.0	1.2	1.7	×	○	333	13.7	7.7	2.4	○	×	高平文あり、折付瓦、出面に水切り痕あり	第132回-117 図662-117
NK23	左三巴	○	15.4	2.4	3.1	19	0.9	1.0	1.9	×	○	—	—	—	—	—	×	高平文あり、折付瓦、出面に水切り痕あり	第132回-118 図662-118
NK24	左三巴	○	16.3	2.0	3.1	(19)	0.9	1.0	2.0	×	○	—	—	—	—	—	×	高平文あり、折付瓦、出面に水切り痕あり	第132回-118 図662-118
NK25	左三巴	○	16.5	1.9	2.9	(19)	0.8	1.4	2.0	×	○	—	—	—	—	—	×	高平文あり、折付瓦、出面に水切り痕あり	第132回-119 図663-119
NK26	左三巴	○	16.6	2.2	3.1	(19)	0.9	1.2	2.0	×	○	—	—	—	—	—	×	高平文あり、折付瓦、出面に水切り痕あり	第132回-120 図663-120
NK27	左三巴	○	(13.7)	1.7	2.4	(15)	0.7	1.0	1.6	×	○	—	—	—	—	—	○	高平文あり	第132回-120 図663-120
NK28	左三巴	○	(14.0)	1.6	2.3	(19)	0.9	1.0	1.5	×	○	—	—	—	—	—	—	高平文あり(CT203-217と関係か?)	第132回-120 図663-120

軒平瓦

番号	通称名	瓦当部				互当部		外縁部		裏取部		平瓦部		組合部		備考	類	遺物番号		
		紋様	高さ	厚さ	幅	内縁	外縁	内縁	外縁	高さ	厚さ	幅	高さ	厚さ	幅					
N41	OT203	宝珠蓮文	○	—	21	2.5	—	0.5	4.1	2.0	2.7	○	×	×	×	×	○	×	宝珠文同様の変型なし、范平文あり	第93回-97 図615-97
N42	SK59	宝珠蓮文	○	—	22	—	—	0.6	4.0	2.1	2.7	○	×	×	×	×	○	×	宝珠文同様の変型なし、范平文あり	第93回-99 図616-99
N43	OT203 SK81	半枝蓮文 蓮草文	×	—	26	—	1.3	—	0.7	4.5	2.7	1.7	—	—	—	—	—	—	宝珠文同様の変型なし、范平文あり	第93回-99 図616-99
N44	OT203 SK93	宝珠蓮文	○	22	21.6	2.2	3.3	1.0	1.4	0.6	4.0	2.3	2.8	○	×	×	×	×	宝珠文同様の変型なし、范平文あり	第93回-99 図616-99
N45	OT203	宝珠蓮文	○	22.0	21.8	2.2	2.7	1.2	0.6	3.9	2.1	2.7	○	×	×	×	×	×	宝珠文同様の変型なし、范平文あり	第93回-99 図616-99
N46	OT203	半枝蓮文 蓮草文	×	—	24	1.4	1.3	—	0.7	4.6	2.4	1.7	○	×	×	×	×	×	宝珠文同様の変型なし、范平文あり	第93回-99 図616-99
N47	OT217 SD103	蓮草文	×	—	29	—	1.0	—	0.9	4.8	2.9	1.9	○	×	×	×	×	×	凸面取手ありに凹面取手あり	第7回-56 図66-56
N48	OT217 SD103	蓮草文	×	—	26	1.8	—	—	0.7	4.8	2.5	1.8	○	×	×	×	×	×	N46と凹面取手あり	第7回-58 図66-58
N49	OT217 SD103	半枝蓮文 蓮草文	×	22.6	22.1	2.2	2.0	0.9	1.2	0.5	3.7	2.1	1.5	○	×	×	×	×	范平文同様の一部分を切り取る、CT231-池津遺構(N47)と同型	第7回-59 図66-59

第35表 瓦観察表(2)

軒平瓦

番号	透姓名	瓦 部										鎌 倉 部			備 考	種	透物番号			
		枚 積	法 場	厚さ	型 号	左 区	右 区	外 区	瓦 区	横 部	面 取 り	全 瓦	厚 止	滑 止				接 合 方 法	平瓦部に キズ目	甲部に キズ目
	内区	上	下	厚さ	型 号	左 区	右 区	外 区	瓦 区	横 部	面 取 り	全 瓦	厚 止	滑 止	接 合 方 法	平瓦部に キズ目	甲部に キズ目			
N-10	半軟梅花 水波文	○	—	2.5	—	1.5	—	0.9	5.0	2.5	2.1	○	×	×	×	×	×	半軟梅花が中心裏りに左右 に水波文と半軟梅花を配す	Ba	第720-60
N-11	宝珠蓮華文	○	21.5	22.2	2.4	3.1	1.1	1.4	0.5	3.9	2.1	○	×	×	○	×	×	宝珠文周囲の支那なし。若干 ズあり	AIIa	
N-12	宝珠蓮華文	○	22.5	22.2	2.5	2.9	1.1	1.2	0.6	4.0	2.1	○	×	×	×	—	—	宝珠文周囲の支那なし。若干 ズあり。凸面瓦当裏りに 宝珠文の木目風。凸面裏に 刺。釘穴1所	AIIa	第720-55 図56-55
N-13	宝珠蓮華文	○	21.9	22.2	2.0	2.3	1.1	1.2	0.6	4.0	2.0	○	×	×	×	×	×	宝珠文周囲の支那なし。若干 ズあり	AIIa	
N-14	宝珠蓮華文	○	21.3	21.6	2.3	2.7	1.2	1.3	0.6	4.5	2.1	○	×	×	×	×	×	宝珠文周囲の支那なし。若干 ズあり	AIIa	
N-15	宝珠蓮華文	○	—	—	2.4	2.4	—	1.3	0.7	4.0	2.1	○	×	×	×	×	×	宝珠文周囲の支那なし。若干 ズあり	AIIa	第720-61 図55-61
N-16	半軟梅花 水波文	×	—	—	2.2	2.8	1.3	—	0.8	5.3	2.5	—	×	×	×	×	×	半軟梅花が中心裏りに左右 に水波文と半軟梅花を配す。 凸面瓦当裏りに宝珠蓮華文の 木目風	B	第720-83
N-17	半軟梅花文	×	—	—	2.5	—	—	—	0.9	5.1	2.5	2.3	×	×	×	×	×	半軟梅花が中心裏りに 宝珠文あり。凸面瓦当裏りに 宝珠蓮華文の木目風	B	第720-84
N-18	宝珠蓮華文	○	—	—	2.3	3.1	—	1.3	0.7	4.2	2.1	2.6	○	×	×	×	×	宝珠文あり。凸面瓦当裏りに 宝珠蓮華文の木目風	AIIa	第720-82 図54-82
N-19	宝珠蓮華文	○	—	—	2.7	—	—	1.3	0.5	4.1	2.2	2.7	○	×	×	×	×	宝珠文あり	AIIa	
N-20	蓮華文	×	—	—	3.5	—	—	0.6	0.9	3.2	3.0	1.5	○	×	×	×	×	蓮華文。蓮文は大裏りに。蓮 文中央に雲合縁の入り。裏面 を丁寧に刷ワテする	E	第1308-132 図54-132
N-21	半軟梅花 半軟蓮華文	×	—	—	2.7	1.1	—	0.5	3.9	2.6	2.1	○	○	×	×	×	×	隣瓦。瓦面縁の溝草の一部 を切り捨てる。凸面に水返し が浅。釘穴1所。凸面瓦当 裏りに宝珠蓮華文の木目風 あり。CT1217—SD103N410と 同瓦	C	第1308-134 図56-135
N-22	半軟梅花 水波文	×	25.5	26.0	2.4	2.4	1.2	1.6	0.8	5.2	2.8	2.0	○	×	×	—	—	半軟蓮華文が中心裏りに左右 に水波文と半軟蓮華文を配す。 凸面に右白縁と刺付の外縁。 凸面瓦当裏りに宝珠蓮華文の 木目風あり	Ba	第1308-130 図56-130
N-23	半軟蓮華 水波文	×	—	—	3.0	—	—	1.6	0.8	4.9	2.7	2.3	○	×	×	×	×	右端の上向き水波は本。凸 面に刺付。右白縁	Bb	第1308-131 図56-131

第36表 瓦観察表 (3)

軒平瓦

番号	清浄名	瓦 当 部										平 五 部			接 合 部		備 考	類	測 定 番 号		
		紋 様		張 幅		瓦 型		瓦 距		瓦 厚		全 長	止 止	止 止	接 合 方 法	平 五 部 二 部 分					
		上	下	上	下	左	右	左	右	左	右									厚	厚
N424	瓦当透写文	○	225	230	3.8	3.2	1.5	1.1	0.6	5.1	2.8	3.8	○	×	○	×	○	×	○	玉体文周囲の変遷なし。瓦平 ズあり、左端縁の透写文。 凸面に凹型調製台の狂風、希 目縁あり。	Alb1 図65F-247
N425	瓦当透写文	○	229	—	4.5	3.3	1.3	0.7	4.7	2.5	4.2	○	×	○	×	○	×	○	×	瓦平ズあり、凸面に凹型調製 台の木目風。縁取が深い。	Alb1 —
N426	瓦当透写文	○	227	233	4.3	3.5	1.3	1.4	0.5	5.0	2.8	3.8	○	×	○	×	○	×	○	瓦平ズあり、凸面に凹型調製 台の木目風。	Alb1 —
N427	瓦当透写文	○	228	231	3.9	3.4	1.5	1.4	0.6	5.0	2.0	4.0	○	×	○	×	○	×	○	瓦平ズあり、縁取が深い、凸 面に凹型調製台の狂風あり。	Alb1 —
N428	瓦当透写文	○	240	244	3.0	—	1.4	2.6	0.7	4.5	2.2	3.1	○	×	○	×	○	×	○	隅取(左側)、瓦当透写文周 か ら斜めに半集した次の箇所 から斜めに半集した次の箇所 から斜めに半集した次の箇所 あり、凹面に縁取あり、凸 面に凹型調製台の狂風、希 目縁あり、上縁取あり。	Alb2 —
N429	瓦当透写文	○	245	243	3.1	—	2.6	1.4	0.6	4.3	2.1	2.8	○	×	○	×	○	×	○	隅取(右側)、瓦当透写文周 か ら斜めに半集した次の箇所 から斜めに半集した次の箇所 から斜めに半集した次の箇所 あり、凹面に縁取あり、凸 面に凹型調製台の狂風、希 目縁あり、上縁取あり。	Alb2 —
N430	瓦当透写文	○	244	247	3.5	2.5	2.2	1.5	0.6	4.4	2.2	3.2	○	×	○	×	○	×	○	隅取(右側)、瓦当透写文周 か ら斜めに半集した次の箇所 から斜めに半集した次の箇所 から斜めに半集した次の箇所 あり、凹面に縁取あり、凸 面に凹型調製台の狂風、希 目縁あり、上縁取あり。	第137図—135 図65F—135
N431	池田瓦調	○	228	229	3.3	2.2	0.9	1.4	0.8	4.7	2.8	2.4	○	×	○	×	○	×	○	瓦平ズあり、凸面に凹型調製 台の狂風あり、縁取が深い。 上縁取あり。	Alb2 —
N432	瓦当透写文	○	—	—	3.3	—	1.4	—	0.7	4.5	2.5	3.0	○	×	○	×	○	×	○	瓦平ズあり、凸面に凹型調製 台の狂風あり、縁取が深い。 上縁取あり。	Alb2 —
N433	瓦当透写文	○	226	228	4.2	3.2	1.0	1.6	0.6	4.8	2.8	3.4	○	×	○	×	○	×	○	瓦平ズあり、瓦当透写文、 釘穴あり。	Alb2 —
N434	瓦当透写文	○	—	—	3.1	—	—	—	0.6	5.1	2.7	3.4	○	×	○	×	○	×	○	瓦平ズあり、瓦当透写文、 釘穴あり、縁取が深い。	Alb2 —

第37表 瓦観察表(4)

丸瓦

番号	通称名	凹面		凸面		重取り		全高	縁高	玉縁高	高さ	凹面				玉縁高	玉縁幅	玉縁厚	瓦質	備考	期	遺物番号		
		栞目	栞目	栞目	栞目	栞目	栞目					栞目	栞目	栞目	栞目								栞目	栞目
M21	OT217 SD103	○	×	×	×	×	×	—	4.6	2.2	7.4	2~2.5	—	2.1	14.6	14.7	—	0.51	凹面に縁の差味、瓦、縁無し。内タナ横	M	図版65-188			
M22		○	×	×	×	×	×	—	3.8	1.8	6.7	1.5~2.1	—	1.2	13.3	13.5	10.1	(0.50)	凹面に7縁の差味、瓦、栞目内タナ横	G				
M23	OT217	○	×	×	×	×	×	—	—	—	1.8	2.1	5.0	—	1.34	—	—	(0.51)	凹面に7縁の差味、瓦、栞目内タナ横	G	新730-81 図版40-81			
M24	SK301	○	×	×	×	×	×	2	35.7	30.1	5.6	1.5~2.3	6.3	1.5	14.4	14.9	11.2	8.2	0.49	凹面に10縁の差味、瓦、縁無しが破れて転土がみみ出した。糸切り風が目立つ	H2	新730-90 図版40-90		
M25		○	×	×	×	×	×	—	(32.7)	27.0	—	3.3	1.5	—	14.8	—	11.4	—	0.64	凹面に縁無し。玉縁に打丸。軒丸瓦の形。瓦面は平直	Q	新1330-122 図版64-122		
M26		○	×	×	×	×	×	1	—	5.5	3.1	7.9	1.3	—	15.4	11.7	(0.0)	0.51	凹面に10縁の差味、瓦、凸縁子子の単位は幅広	B				
M27		○	×	○	○	○	○	1	—	4.6	2.6	7.9	2.0	—	14.7	11.3	8.5	0.54	凹面に7縁の差味、瓦、糸切り風	C1				
M28		○	×	○	○	○	○	1	—	5.9	2.9	7.8	2.2	—	15.5	12.2	8.3	0.50	凹面に7縁の差味、瓦、糸切り風	C2	図版64-246			
M29		○	×	○	○	○	○	1	—	6.9	2.8	7.7	2.1	—	15.3	11.6	(8.0)	0.50	凹面に7縁の差味、瓦、	C3				
M30		○	0.8	○	○	○	○	—	—	—	2.7	7.0	1.8	—	14.6	—	—	0.48	凹面に縁無し。凸縁子子の単位は幅広	D	新1330-125 図版64-125			
M31		○	0.7	○	○	○	○	1	—	5.9	2.7	7.6	1.7	—	15.1	10.9	8.1	0.50	凹面に7縁の差味、瓦、糸切り風。糸切り	D2				
M32	OT231 池内遺蹟	○	×	○	○	○	○	—	—	—	2.7	7.3	1.5~2.1	7.4	—	15.6	—	—	0.47	凹面に糸切り風。凸縁面凹縁面を重取りする。凸面と凹縁面に打丸	F	新1330-124 図版64-124		
M33		○	×	×	×	○	○	2	31.9	27.3	4.6	2.3	7.0	1.5~2.4	5.7	2.1	15.2	12.0	8.4	0.46	凹面に縁の差味、瓦、糸切り風	Eb1		
M34		○	×	○	○	○	○	2	31.7	26.8	4.9	2.3	7.5	1.9	5.4	2.3	15.5	12.0	9.2	0.48	凹面に7縁の差味、瓦、縁無し。糸切り風	Eb1	新1330-123 図版63-123	
M35		○	×	○	○	○	○	2	31.3	27.1	4.2	2.3	8.0	1.8	6.4	1.2	14.9	11.6	(7.4)	0.54	凹面に7縁の差味、瓦、縁無しが破れて転土がみみ出した。糸切り風	Eb1		
M36		○	×	×	×	○	○	2	30.8	26.1	4.7	2.1	7.0	1.8~2.3	5.6	2.3	15.1	14.8	11.4	(8.3)	0.46	凹面に7縁の差味、瓦、糸切り風。縁長いヤブタ。面は平直	Eb2	図版64-244
M37		○	×	×	×	○	○	2	31.1	26.6	4.5	2.2	7.0	1.4	5.8	1.6	14.0	14.2	11.0	7.3	0.50	凹面に7縁の差味、瓦、糸切り風。凸面のハナ子子の単位は幅広、裏い	Eb3	
M38		○	×	×	×	○	○	2	31.1	26.2	4.9	2.3	7.9	2.0~2.7	6.0	2.1	13.5	14.1	10.8	—	0.59	凹面に7縁の差味、瓦、縁無し。糸切り風	Eb3	図版64-245
M39		○	×	×	×	×	×	2	29.8	24.8	5.0	2.7	7.5	1.0~2.0	—	13.7	14.6	11.3	—	0.55	凹面に縁の差味、瓦、縁無し。面は平直面を呈す。軒丸瓦の形	Ea		
M40		○	×	×	×	×	×	2	28.7	25.3	4.4	2.5	7.6	1.4~2.4	—	14	13.5	14.3	—	8.0	0.56	軒丸瓦の形	Ea	

第39表 瓦観察表(6)

第3節 酒蔵の所有者について

湊町の酒蔵

江戸時代の湊町に接する大手・鍛冶屋・魚屋・泉の各町は伊丹でも有数の酒造地帯で酒蔵が林立していたが、湊町内にも多くの蔵があったことが地割から想定できる。幕末の郷土史家梶曲草が彼の編著になる『有岡古統語』のなかで記した「伊丹酒家盛衰之事」（『伊丹市史』第4巻。以下、『伊丹市史』を『市史』と略記する。）によれば、文化～元治（1804～65）頃、湊町には榊利（榊屋利兵衛）・天喜（天満屋喜助）・伝吉（伝法屋吉右衛門）・雑古屋跡井筒屋の4蔵があり、うち天喜・伝吉蔵はこの期間に新たに建てられたもので、井筒屋蔵は取り払われたという。天保3年（推定、1832）には山田屋五郎助の湊町蔵（酒造株高675石）があった（『市史』第2巻、表63）が、この4蔵との関係は不明である。

「天保15年伊丹郷町分間絵図」で面積がおおむね1反歩以上の土地を酒蔵の候補地としてみると、別図のA～Iの9ヵ所ある（第5図）が、そのうちBは明治19年10月（1886）の伊塚利兵衛蔵（梶曲草の記録の「榊利」蔵）で本報告書の対象とした富士山蔵、Eは同年の谷垣兵介蔵（酒銘は「生實」）、Hは同年の上田与兵衛蔵（以上、「明治19年酒造場絵図面届書写」伊丹酒造組合文書23）で、Iは西隣鍛冶屋町の扇田家住宅に接続する酒蔵があったと思われる（『市史』第6巻）。大正～昭和戦前には富士山蔵以外は宅地が多くなり、とくに置屋・茶屋などの歓楽街が形成されていた（『聞き書き 伊丹のくらし～明治・大正・昭和～』伊丹市立博物館）。

江戸時代の富士山蔵とその所有者

富士山蔵については『市史』第6巻に解説があり、建築年代はほぼ幕末と考えられている。本文には「表通りに沿うミセ空間をのぞくと、巨大な土間空間が開け、その奥妻側にミセから接続した二室が設けられるのみである。他に例を見ない平面である」と記され、広大なウチニワを持つ復原平面図が掲載されている。

伊塚利兵衛の江戸時代の屋号は榊屋で、古文書では寛政4年（1792）に初めて名が見える（「酒造家備人取締り願書」伊丹酒造組合文書、『市史』第4巻）。文政13年（1830）には「高砂」「玉吹」「幸菱」「一鼓」の4つの酒銘を保有していた（柚木学「摂州伊丹酒樽銘鑑」『地域研究いたみ』第8号）。

推定天保3年（1832）の「伊丹郷酒造株控」（『市史』第4巻）によれば古株2株751石4斗9升+250石に文化元年（1804）増石798石5斗1升を加えて計3株1800石を保有し、別に米屋町蔵として3株500石を保有していた。前の3株1800石が湊町の蔵の分と思われる。同11年には古株3株2277石3斗9升に文化元年増石2株1093石3斗1升を加え、計5株3370石7斗に増加している（『市史』第2巻）。同3年との差、古株1275石9斗、増石分294石8斗、計1570石7斗は、同3年の榊屋七兵衛三ツ玉家の石高に一致する。11年には榊屋七兵衛の名が見られないことから、この間に七兵衛の三ツ玉家蔵を取得したものともて間違いない。慶応3年（1867）には原田屋徳七がこの蔵で代造していたことが知られる（今井美紀「慶応3年御用留」『地域研究いたみ』第8号）。徳七は湊町の住人で、明治初年には醤油株150石を所有している（「濁酒・醤油造高冥加金書上」『伊丹酒造家史料』下）が、醤油蔵の位置は不明である。

なお、利兵衛の米屋町蔵は宮ノ前通り入口の東側にあったが、その後利兵衛の同族と思われる榊屋利右衛門へ、さらに津国屋三郎・坂上屋ちか（津国屋の一統）らへと次々と所有者が替わり、明治4年からは石橋家が所有して「古菱蔵」と呼ばれた蔵である。平成5年4～7月に発掘調査が行われ

ている（有岡城跡・伊丹郷町遺跡第123次調査。「有岡城跡・伊丹郷町Ⅶ一宮ノ前地区市街地再開発に伴う発掘調査報告書一」参照）。

一方、樽屋七兵衛は文政13年が初見で「本菱」「神泉」など伊丹でもっとも多い11もの酒銘を保有している（前記「摂州伊丹酒樽銘鑑」）。天保3年には三ツ玉家以外に別の蔵3株966石、合わせて5株2536石余を保有している。七兵衛の蔵が南昆陽口に所在したことは前掲の「伊丹酒家盛衰之事」でわかるが、場所の特定はできていない。11年には樽屋名義に替わっている。すえの名は安政2年（1855）まで見られるが、その後の変遷は追及できていない。

近代の富士山蔵とその所有者

近代に入り、明治3年の樽屋利兵衛蔵は淡町蔵が鑑札3枚、酒造米高1999.8石（うち2枚1164.9石は休造）、淡町南蔵が2枚866.6石（うち1枚533.3石は原田屋総七へ貸株、1枚333.3石は休造）となっており（『伊丹町酒造米高書上帳』『市史』第5巻）、酒造米高の少ない南蔵の方が前記七兵衛の三ツ玉家蔵に当たると思われる。これ以後、同19年までの間に2つの蔵が統合・改造されて一つの巨大な蔵になったであろう。利兵衛の名は同5年以後には見えず（『市史』第3巻、表12）、廃業したと思われるが、前述の明治19年のこの酒蔵の図面（前記「届書写」。第183図）には伊塚利兵衛の名が記されている。伊塚姓の酒造家はほかに明治3年の豊之助・吉右衛門、同11～16年の伊塚豊介がいるが、19年以前の富士山蔵とのかかわりは不明である。

その後小西家が取得するまでの経緯も今のところ不明であるが、明治42年には小西新右衛門所有の5蔵の中に富士蔵があり（同前、表48）、その5蔵体制は36年からである（同前、表49）ので、同年に取得したとも考えられる。翌37年5月の図面があり（小西新右衛門文書（近代）II17。第185図・第186図②）、富士山蔵の旧称が丁蔵であったことがわかる。ほかに同42年12月・44年12月・年不明などの図面もあり、37年の図と比べると、39年には酒造蔵増設、廻室・会所場移転、検査室と釜屋脇の煙突新設など、42年には居宅撤去、澄し場2ヵ所新設（酒蔵を用途変更）などの変化がある（第186図）。なお、同39年の図面は『伊丹の民具 伊丹の酒造り道具』（伊丹市文化財保存協会）に掲載されている。

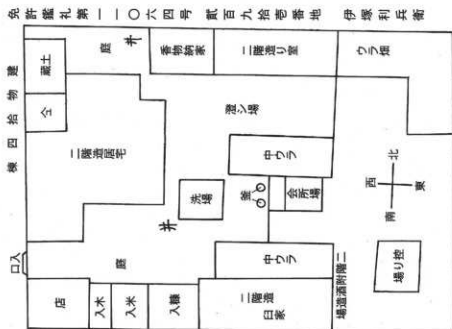
小西家では富士山蔵を含む明治期の主力工場を甲蔵～丁蔵と名付けていた。後に甲蔵（本町339番地）・乙蔵（同338番地）はあわせて中蔵と呼ばれたが、さらに昭和2年には宝蔵・北蔵と改称された（小西新右衛門文書（近代）I 503-7-4）。平成15～16年に有岡城跡・伊丹郷町遺跡第276次調査で発掘されている。丙蔵は後の東蔵で長谷堂576番地にあり、平成18年の第309次調査で江戸後期の酒蔵遺構を検出している。丁蔵が富士蔵・富士山蔵と改称するのは、明治39年の図面からである。

（和島恭仁雄）

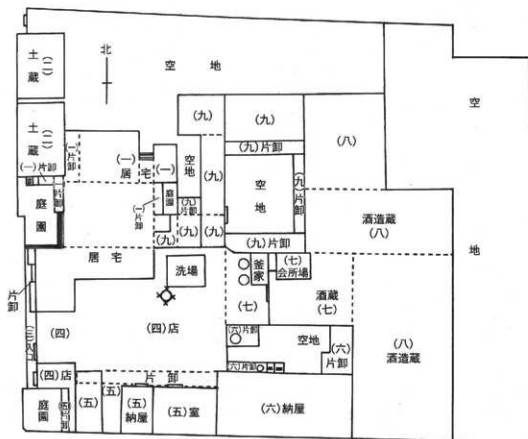
註 第184図は原本に虫損があるためトレースし、図中の文字も活字化した。

また、第185図は原本の寸法が大きく、かつ後年の改造にともなう線や文字の追筆が多く見られる。単色で印刷すると煩雑になるので、これもトレースし、当初の明治37年の記載事項のみを表現した。なお、文字の向きも一定方向に揃えて入れた。原本をそのまま縮小した第186図②を参照されたい。図中の（～）は宋字で、図の右側にそれぞれの面積合計が記されているので、下表にまとめて記す。

番号	建物名	面積	番号	建物名	面積
(一)	居宅 片卸とも	62坪1合6勺	(ハ)	納屋 片卸とも	43坪3合
(二)	土蔵	25坪5合	(七)	酒蔵・釜室・会所場	34坪5合
(三)	片卸	4坪9合2勺	(ハ)	酒造蔵	140坪2合6勺
伊	店	65坪3合	(九)	(不明) 片卸とも	51坪5勺
(五)	室・納屋 片卸とも	34坪9合		惣坪 (建家下坪)	461坪1合9勺



第184図 「明治19年酒造場絵図面届書写」(伊丹酒造組合文書)



第185図 「明治37年酒類製造場図面」(小西新右衛門文書)

第4節 富士山蔵の酒造遺構について

富士山蔵は、伊丹郷町の西北部、旧湊町に所在する酒蔵で小西酒造株式会社が保有していた。小西酒造は、江戸時代前期には菜屋、後に小西屋の屋号で酒造りを始め、その後江戸時代を通じて伊丹の有力酒造家に成長している。主要銘柄の白雪は有名である。富士山蔵は、昭和18年の酒造統制以降、戦後も酒造りは行われていなかった。解体前は、正面に店舗、奥に洗い場・釜屋、大蔵など多数の建物が存在し、そのうち店舗の建築年代は幕末期に推定されている（註1）。

小西家がこの酒蔵を取得したのは明治36年頃で、それ以前は江戸時代からの伊丹の酒造家樽屋利兵衛の所有であった。樽屋は寛政4年(1792)に酒造家としてその名が古文書で確かめられるという（第3節「酒蔵の所有者について」参照）。富士山蔵での発掘調査では、江戸時代後期から戦時統制により酒造りを停止した昭和18年までの酒造遺構が多数検出され、この間の建物の建て替えや増築、酒造施設の更新や改良の跡も明らかになった。本項では、酒蔵がこの場所に建てられて後、どのような変遷をたどっていったのかを、建物と酒造遺構の考古学的調査成果から検討してみたい。また、この酒蔵には、明治19年を初めとする明治から昭和にかけての酒蔵絵図面が残されているので、併せて検討しておきたい。

この蔵の名称は、明治36年頃に小西酒造が取得した後しばらくは丁蔵、明治39年から富士山蔵と呼ばれるようになったもので、江戸時代に樽屋が所有していた頃の名称は明らかではない。

酒造場図面の検討

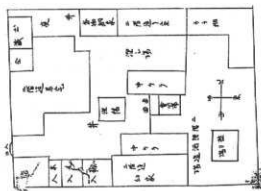
富士山蔵に関する酒蔵図面は6点ある（第186図）。年代順に示すと下記のとおりである。

- ①明治19年（「明治19年酒造場絵図面届書写」伊丹酒造組合文書23）
- ②明治37年（小西新右衛門文書〈近代〉Ⅱ17）
- ③明治42年（小西新右衛門文書〈近代〉Ⅱ17-12）
- ④明治44年（小西新右衛門文書〈近代〉Ⅱ17-16）
- ⑤年代不詳（小西新右衛門文書〈近代〉Ⅱ17-31）
- ⑥昭和2年（小西新右衛門文書〈近代〉Ⅱ20-9-5）

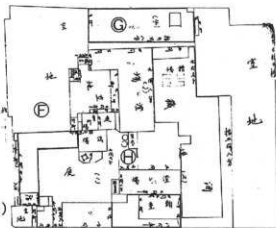
① 明治19年絵図は、敷地の範囲を方形に描き、敷地内の建物の範囲を線で区切っただけの見取り図であり、「建物拾四棟」と記されているが、それぞれの建物の境目が不明確である。おそらく、建物が開口部を共有しながら繋がっているであろう。主要な建物として「二階造居宅」、「二階造白家」、「二階附酒造場」、「澄し蔵」、「二階造り室」があり、内部施設として「洗い場」、「井戸」、「釜」、「会所場」、「搾り場」がある。洗い場は独立した建物ではなく、「二階造居宅」の土間に設けられている。清酒と粕を分離する槽場は「二階造酒造場」内に位置している。

② 明治37年絵図は、①の絵図に比べて各々の建物の規模や名称も詳しく記されている。また、数棟が一つながりになっている場合でも、その境目は破線で記されており、範囲が明確になっている。明治19年段階で14棟の建物があったと記されているが、この絵図では34棟の建物が存在したと記されている。絵図面を見る限り、①と比べても特段に建物が増築されたとも見えないので、この絵図では納家から便所までそれぞれを1棟として数えられているのであろう。

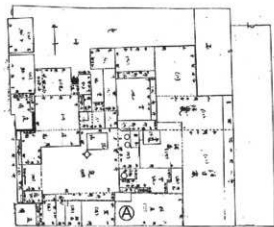
明治19年から変化した点について見てみると、明治19年当時の白家が納家(A)に変更されている。白家は玄米を精米する場所で、麓では早くから六甲山系の水流を利用した大規模な水車精米が導入され、効率化が図られているが、伊丹では伝統的に人力による足踏み精米が続けられてきた。富士山蔵



①明治19年(「明治19年酒造場絵図面届書写」)



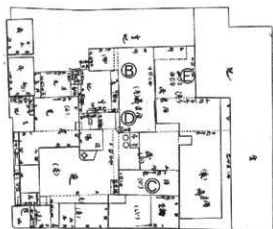
④明治44年(小西新右衛門文書<近代>Ⅱ 17-16)



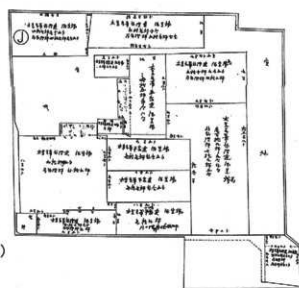
②明治37年(小西新右衛門文書<近代>Ⅱ 17)



⑤年代不詳(小西新右衛門文書<近代>Ⅱ 17-31)



③明治42年(小西新右衛門文書<近代>Ⅱ 17-12)



⑥昭和2年(小西新右衛門文書<近代>Ⅱ 20-9-5)

では、明治37年以降の絵図面には白家が描かれていないので、伝統的な足踏み精米も明治19年から同37年の間に酒蔵内では行われなくなっていったことになる。

③ 明治42年絵図面では、酒造場2棟が増築されるなど大きな変化が認められる。そのうち1棟は、敷地北東部に建てられた南北棟③で、規模は桁行9間8分、梁行4間、もう1棟は釜屋南側の空地に建てられた東西棟④である。規模は桁行7間半、梁行2間8分である。施設の変化では、釜屋の北側に煙突①が新設されている。

酒造用竈は、土間より掘り下げて築かれた半地下式の構造で、大小2基が一組になっている。大きい釜を大釜と呼び蒸米に用い、小さい方を脇釜と呼んで主に湯を沸かすのに用いるという(註2)。この構造は江戸初期から変わっていない。江戸時代以来の竈には煙突はなく、焚口から上る煙は屋根に設けられた煙出し用の小屋根から外に放出されていた。酒造用竈に煙突が設けられるようになるのは、酒造用竈にレンガ積みが導入された段階からで、レンガ造り竈の導入と同時に燃料が薪から石炭へ替わったことも関係していると考えられる。富士山蔵では明治42年には石炭を燃料とするレンガ造り竈が導入されたとみられる。もう一つの変化は、奥の酒造場にあった「槽場」が北側の蔵⑤に移動していることである。絵図面には長方形の酒槽4基が「田の字」型に配列されているようすが描かれている。

④ 明治44年絵図面では、居宅北側にあった住居部分がすべて取り払われ空地⑥となっている。江戸時代以来の酒蔵は、敷地内に酒造家が居住する住居が併設されているものが多いが、この段階では不要となったのであろう。また、敷地北側に桁行12間8分、梁行4間の大型の酒造場⑦が増築されている。こうしたことから、不要な住居機能を廃して酒造場を増築するなど、醸造機能の拡充が進められていったものと考えられる。施設の変化としては、釜屋の南側に隣接して「石炭入」⑧が新たに設けられている。先の明治42年絵図ではレンガ造り竈が導入され、燃料が石炭に替わったと推測したが、2年後には専用の石炭貯蔵場所が設けられたことになる。

⑤ この絵図面に年代が示されていないが、「丁蔵」と記載されていることから、小西家が所有蔵に甲蔵・乙蔵などの名称を付していた明治36～39年の間に作成されていたことがわかる。明治37年絵図面と大差ないが、居宅①の間取りが克明に記されている。

⑥ 昭和2年絵図面には、敷地北西隅に新たに木造2階建の酒造場⑧が増築されている。

発掘された酒造遺構の検討

発掘された酒造遺構には、酒蔵建物と酒造施設がある。酒蔵建物は、その代表的なものとして店舗、洗い場・釜屋、大蔵、澄し蔵がある。この他にも、精米を行う白家や廻室が独立して建てられる場合もある。さらには酒造家の居宅や杜氏の居住施設から米蔵や薪蔵など多岐にわたっている。絵図面では確認できるが、発掘調査ですべての建築物について検出できたわけではない。発掘調査の手法上、上層部を掘り下げてから調査を行っているため、地表面上に存在する礎石などはほぼ除去されている。ただ店舗や大蔵の建築物は、礎石下にも丁寧な根石(基礎)が設けられており、その根石の存在から建物の規模や間取りなどを推測した。

建物

確認された建物遺構はすべて礎石建物である。検出された礎石および礎石下の根石や壁通りの石列などから8棟の礎石建物(1～8)の存在が明らかになった。

礎石建物1は、敷地の南西部に位置し、正面を西側に向けたつし2階建て本瓦葺きの建物である。震災により被害を受けその後解体された。『伊丹市史』第6巻によると、間口(桁行)8間半、奥

行（梁行）は現状で10間、元は奥に1間半さらに延びていたという（註3）。表には半間格子をもつ庇が造られていた。内部はL字形に座敷が回り、その他は広大な土間が設けられている。土間には酒造用の竈や井戸が設けられていたとも考えられるが、竈1の稼動時期は幕末の建築とする建築学的所見より古く、出土遺物から19世紀までは下らないこと、酒造用の井戸と考えられる井戸4が礎石建物1の礎石35に切られていることなどから、礎石建物1に先行する酒蔵建築が存在した可能性が高い。

先行する建物は、礎石建物1ほど明瞭な礎石（根石）が明らかではないが、土坑内部に石が詰まったSK39やそれに続く溝状の遺構などは、建築物に関係する遺構と考えられる。建物規模は判然としませんが、中央部に広い土間を有する構造であったと考えられる。

礎石建物2は、礎石建物1の背後（東側）にある建物で、酒蔵創業期の槽場がこの位置から検出されたことから、当初は仕込蔵が建っていたと考えられる。明治19年当時には釜屋として利用されている。仕込蔵と釜屋では規模や構造が異なるので、建て替えられたとみられる。礎石建物3は、明治19年、同37年の絵図面には描かれておらず、同42年段階で初めて認められることから、その間に建築されたことになる。

礎石建物4は、大蔵（仕込蔵）に相当する。南北3列に礎石が並び、中央やや南側には槽場が設けられ、清酒と粕を分離する圧搾工程もここで行われた。建築年代は、蔵の南部に槽場（231次南区一男柱1）が設けられた19世紀初頭頃と推定される。

礎石建物5は、礎石建物4に接して開口し、一連の建物として利用されている。蔵内部の槽場（231次北区一男柱1）の稼動時期が19世紀初頭頃であることから、礎石建物4と同時期に建てられた可能性が高い。

礎石建物6は、礎石建物5の北側に接して建てられた東西棟である。建築年代は明らかではないが、この場所に槽場（217次B区一男柱1・2）が設けられた段階と考えられる。その時期は、礎石建物4・5が建てられた19世紀初頭から明治19年の間と推測される。また、明治44年から昭和2年の間に東側に4間ほど増築していることが、絵図面から確認できる。

礎石建物7は、明治42年になって初めて確認される新しい建築である。南北棟の平屋建てで、礎石は確認できなかったが、東側壁通りの石列が残っていた。蔵の中央部から槽場（217次B区一槽1～3）が検出されたが、建築当初には槽場は設けられていなかった。明治44年の時点で槽場は礎石建物6にあった。

礎石建物8は、礎石建物1の北側に続く居宅である。酒蔵の所有者の住居として建てられたものであろうが、明治44年には取り壊されて空地になっている。居宅の礎石（SK56）が竈3（217次B区一竈9）を切っていることから、建築年代は19世紀前半以降になると考えられ、礎石建物1が建てられた幕末期に一体となって建築された可能性が高い。

酒造施設

蔵内には、酒造工程に基づいて多くの施設がある。地下に痕跡を残し、発掘調査で検出される施設の代表的なものは、洗米工程の井戸、蒸米工程の竈、圧搾工程の槽場の遺構である。これらの遺構は、酒蔵の操業中に造り替えが頻繁に行われている。それだけ消耗が激しいのであろう。また、醸造技術の進歩や生産量の増減による規模の変更など大いに関係していると考えられる。

竈

酒造用の竈の特徴は、竈本体を土間面より掘り下げた半地下式に作り、大小の竈を2基一組にすることである。この特徴は江戸時代に始まり、竈がレンガ造りとなっても踏襲されている。

今回の調査では、酒造用の竈と考えられるものに、竈1、竈3（217次B区-竈9）、竈4、竈5がある。すべての竈は203次調査範囲に位置している。

竈1は礎石建物1の土間に位置し、稼動時期は18世紀中頃まででもっとも古い。これに継ぐ時期の竈は竈3と竈4で、礎石建物1の北側に隣接するように釜屋が建てられていたと考えられるが、発掘調査ではこれを確認できなかった。稼動時期は19世紀前半である。

次の段階は竈5である。この竈の釜屋は礎石建物2である。明治19年には、既にこの場所に竈が設けられている。当初は江戸時代以来の石を組んで粘土を貼り付けた構造であったが、明治38年頃には同じ場所でレンガを用いた竈に造り替えが行われている。レンガ造りの竈に変更となった段階で煙突が設けられ、明治44年には竈の南側に燃料を貯蔵する石炭入れが付設されている。竈5は酒蔵解体時に徹底的に破壊され、レンガ造り竈の掘り方と、漆喰で固めた平面方形の地下式の石炭入れ及び竈から北側に長く伸びる煙道の掘り方が発見された。掘り方を見ると、レンガ竈段階に2段階の変遷が認められ、最終段階の竈は規模が大きくなるとともに、煙道が長く伸び、地下式の石炭入れが北側に設けられ、竈焚口から石炭が取り出せるようになっていた。最終段階の竈は昭和18年まで使用された。

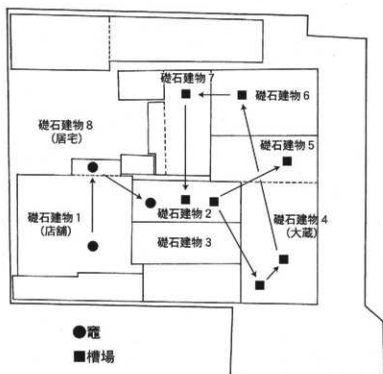
井戸

酒造用の井戸は洗米工程に用いられたもので、井戸に隣接して石敷きの洗い場が設けられている。調査では石敷きの洗い場は検出されなかった。

もっとも古い井戸は井戸2で18世紀代、これに継ぐものは井戸4と考えられる。この井戸は礎石建物1の礎石35に切られているので礎石建物1より古く、先代の建物に付属する井戸と考えられる。時期は礎石建物1の建築年代が幕末と考えられるので、それより古いと見なければならぬ。最終段階の井戸は井戸1で、コンクリートの井戸枠が設けられていた。この井戸が昭和18年まで使用されたものである。礎石建物1の背後に建てられた礎石建物2（釜屋）の竈5とセットになるものであろう。

槽場

酒の圧搾工程の施設である槽場は、竈などよりも著しく場所が移動するとともに、規模や構造が変



第187図 酒蔵遺構の変換（昭和2年酒蔵図面）

化している。もろみを搾り清酒と粕を分離する圧搾工程は、江戸時代以来、男柱を立て、そこに挿入したハネ棒（撥棒）と掛石によってテコの原理で搾る方法が行われてきた。この方法は桿杆式（天秤式）と呼ばれ、後に採用される螺旋式や水圧式・油圧式などに替わっていった。螺旋式は、酒槽上部のジャッキのハンドル（1～1.5mの棒）を回転させて搾るものである。その方法は、ハンドルに付けた縄を、離れた場所に設けた回転棒に巻きつけ、回転棒に通した横木を人力で回転させて搾っていた。また、水圧式・油圧式も酒槽上部に取り付けた機械を水圧機・油圧機によって加圧して酒を搾るものである。これらの圧搾方法の採用時期については、酒蔵によって異なるであろう。伝統的な酒蔵では桿杆式を長く用いたと考えられる。

酒蔵跡から検出される遺構としては、桿杆式では男柱を埋め込んだ大規模な土坑と垂壺を埋め込んだ円形の土坑が特徴的である。男柱は稼動時に上方に浮き上がる力が働いたため、地中では男柱の下部に貫を通し、その上に大きな石を載せて浮き上がらないようにしている。発掘時には地中部の男柱がそのまま残されている場合もあり、今回検出した男柱4（203次）がその例である。また螺旋式や水圧式・油圧式では男柱を用いないため、大型の土坑は伴わない。ただ酒槽から搾られた清酒を一時的に溜める垂壺の跡が検出される。螺旋式や水圧式・油圧式の特徴は、酒槽を地面より一段掘り下げた場所に据えることである。酒槽に合わせて長方形に地面を掘り下げ、その壁面に石垣を組んだものである。今回の発掘調査では3ヵ所から見つかっている。その形式を「槽」という名称で呼んでいる。

槽場（男柱と槽）は、時代によって著しく場所が移動している。最初の槽場（第1段階）は203次一男柱1・男柱4・男柱5と考えられる。男柱の位置は男柱1と男柱4が直線的に並び、男柱4と男柱5は並列する。いずれの男柱も男柱1本に槽（垂壺）が1基伴う「一槽挿し単基型」（註4）である。男柱5を除いて遺構の時期を判別する遺物が出土していないが、男柱4が礎石16に切られているので、礎石建物4より古い遺構である。これら3基の男柱をもつ仕込蔵が存在していたことになるが、礎石が確認できず、その規模や構造は明らかではない。

次の段階（第2段階）は、231次北区一男柱1と231次南区一男柱1である。ともに「一槽挿し単基型」で、231次南区一男柱1が礎石建物4の南西隅に、231次北区一男柱1が礎石建物4の北側に繋がる礎石建物5に位置している。出土遺物から19世紀初頭頃までの稼動と考えられる。

次の段階（第3段階）は礎石建物4の中央やや南側に位置する203次一男柱2・男柱3である。ともに男柱1本に槽（垂壺）2基が伴う「二槽挿し単基型」を背中合わせに2基配置した「二槽挿し連基型」（註5）である。このタイプは、酒槽が4基並ぶもので、伊丹の酒造量ピークに達した19世紀前半以降に主流になってくる。出土した遺物および明治時代の酒蔵絵図面から、稼動時期は明治30年代までと考えられる。次の段階（第4段階）は、礎石建物5に属する217次B区一男柱1・男柱2である。ともに男柱1本に酒槽（垂壺）2基が伴う「二槽挿し連基型」で、それが2基並んだ「二槽挿し連基型」である。明治42年と同44年絵図面には長方形の酒槽が「田の字」型に4基並んで描かれており、発掘成果と一致している。

以上、槽場の変遷を第1～4段階までみてきたが、次の段階（第5段階）から男柱を用いない方法に変化している。それが、217次B区で男柱1・男柱2を切っている槽7・槽8である。槽7と槽8は直交する方向で並んでいるが、その北側には同形式の槽が3基（槽4～6）並んでいる。ともに周囲の壁を石垣に組む半地下式で、底面は砂漆喰を貼っている。底面の一方に垂壺を埋め込んでいた円形の土坑がある。螺旋式か水圧式・油圧式のいずれかの方法が用いられたと考えられるが、槽6から出土した銅板刷りの染付碗や皿の時期からみて、螺旋式であった可能性が高い。その後、槽場は礎石建物7に移っている。

この段階（第6段階）では、3基の槽（217次B区-槽1～3）があった。酒槽置き場は、長方形に石垣を組んだ半地下式で、底面はコンクリートを貼っている。垂壺の据付穴もコンクリートが使用されている。円筒形の形状から見て、槽2・3には備前焼などの壺を使っていないことがわかる。

次の段階（第7段階）は礎石建物3に移る。槽は3基（203次-槽1～3）である。上部がかなり破壊されていたが、長方形の掘り方と垂壺の埋め込み穴が検出された。垂壺の穴にはコンクリートが使用されていた。第7段階は富士山蔵が酒蔵としての稼働を停止した昭和18年までの稼働である。

おわりに

伊丹郷町の酒蔵の発掘調査は昭和60年度以降に行われるようになり、平成7年の阪神・淡路大震災の復興調査で、さらに加速度的に調査事例が増加した。今回の富士山蔵で行った3回の発掘調査もその一例である。伊丹郷町は有岡城の城下から発展した近世の町場で、町の地割などは有岡城下に基礎を置いている。江戸時代前期の段階では、旧城下町に酒蔵が建てられ始め、江戸中期以降は空地化していた旧侍町に酒蔵が進出していった。富士山蔵も旧侍町に進出した酒蔵の一つで、有岡城当時の地割に規制されずに大規模な敷地を確保している。敷地面積は大正4年地積図によれば3反1畝18歩にもおよび、伊丹郷町の酒蔵としては有数の規模を誇っている。

3回に分けて行った発掘調査により、酒蔵全体の約64%の調査が行われた。その結果、江戸時代後期から酒蔵の操業が停止される昭和18年までの間の酒蔵関係遺構の調査を行うことができた。富士山蔵の特徴は、伊丹郷町の酒蔵としては珍しく戦時中まで操業が続いていたことである。伊丹郷町の酒蔵は江戸後期には85軒もの造り酒屋が軒を並べていたが、次第に酒造業の衰退が始まり、昭和10年には富士山蔵を含め20歳まで減少している。こうしたことから、これまでの酒蔵の発掘調査でも近代まで続いた酒蔵の発掘調査事例は稀で、江戸時代から近代、そして現代への酒造遺構の変遷をたどれるものは少なく、その意味でも今回の発掘調査は価値のあるものであった。最後に、富士山蔵の発掘調査から明らかになった点を整理しまとめとしたい。

富士山蔵創業時期

酒蔵建物と竈や井戸の検討から、富士山蔵の創業は18世紀中頃まで遡ることがわかった。当時の酒蔵は、竈1（203次）、井戸4（203次）、第1段階の槽場（203次-男柱1・男柱4・男柱5）の位置や礎石建物との切り合い関係から、敷地全体に及ぶほど規模は大きくなかったと考えられる。

富士山蔵が敷地全体を使った大規模な酒蔵に建て替わったのは、店舗の機能をもった礎石建物1が建てられた幕末期であろう。礎石建物1の建築とともに、大蔵の機能をもった礎石建物4と同5も建てられた。詳細な建築時期は考古学的に明らかにできなかったが、震災後の解体部材の中から、弘化4年（1847）の野宮別当金剛密院（真言宗金剛院）の祈祷札が見つかった。数ある酒蔵建築のうちどの建物と関係するものかはわからないが、酒蔵の主要な建物に打ち付けてあるのが一般的であるので、店舗（礎石建物1）あるいは大蔵（礎石建物4）の可能性がもっとも高い。そう考えると、富士山蔵はやはり幕末期に大きく変貌を遂げたことになる。明治以降には、礎石建物6、同7が増築されているが、全体の建物配置は幕末期に完成されている。

酒蔵の近代化

酒造用竈は、江戸時代以来の大小2基の竈が一組になった形態が踏襲される。これはレンガ造りに代わっても同様である。伊丹郷町の場合一般的に江戸時代前期から次第に規模が大きくなり、江戸後期には最大になる。竈1（203次）は、大型化した段階の竈で、続く竈3（203次）、竈4（203次）も同様である。竈5は激しく攪乱されていたため、構造などは不明であるが、当初は江戸時代以来の粘

土造りであったと考えられ、後にレンガ造りに替えられている。その時期は、酒蔵絵図面から明治37年から同42年の間であることがわかった。42年には石炭入れ（燃料置き場）が竈の脇に設けられており、レンガの導入とともに燃料が薪から石炭へ移行した。石炭入れは、最終段階には竈の北側に移っている。この燃料置き場は地下式で、竈の焚口部に向けて開口している。煙突は当初は竈に近い場所に設置されていたが、最終段階では礎石建物7の軒付近まで延びていた。竈へのレンガの導入と石炭の使用は、伊丹の酒蔵の近代化の重要な事象の一つである。今回の発掘調査により、富士山蔵ではという限定つきではあるが、その時期が確定できたことは重要である。

槽場は江戸後期から7段階の変遷が認められ、創業期の槽場は礎石建物2から礎石建物4にかけての範囲に、その後は礎石建物4と同5の場所に、その後は礎石建物4、次の段階で礎石建物6へ、そして礎石建物7と移り、最終段階は創業期の槽場があった礎石建物2に戻っている。その間に、桿杆式から螺旋式へと圧搾方法が変化している。螺旋式への移行は第5段階からで、螺旋式に移行すると同時に石組みの半地下式の槽場に変更されている。灘地域では、早くから半地下式の槽場が採用されている。男柱を用いた桿杆式の段階から半地下式の槽場が採用され、少なくとも18世紀後半以降に認められる（註6）。半地下式槽場の利点については、圧搾工程でもろみを入れた酒袋を揚げ槽、責め槽合わせて、一度に1600枚ほど酒槽に積んでいくが、酒槽の位置が低いほど労力が省力化される。伊丹では半地下式の槽場の導入は遅れ、圧搾方法に螺旋式が導入された段階からである。その時期は今回の調査と絵図面の検討から大正時代以降と推測される。

明治時代になって伝統産業である酒蔵にも近代化が進められるようになる。レンガ造りの竈と石炭の使用、槽場における螺旋式への移行など、伝統的な伊丹の酒造業に新たな技術や燃料が導入されるようになるが、精米工程の変化もその一つであろう。江戸時代以来、精米工程が行われる白家ほどの蔵にもあり、精米はそれぞれの蔵で行われてきた。ところが明治37年以降、富士山蔵から白家が消えている。このことは個々の酒蔵で精米を行うのではなく、精米所で一括して精米するようになったことを示しているのであろう。その精米所が旧来の人力による足踏み精米とは考え難い。蒸気機関による白搗き精米が、伊丹では明治42年頃から始まったといわれているが（註7）、あるいはもう少し早くから導入されたのではないだろうか。江戸時代から水車精米を行ってきた西宮では、大正元年には蒸気機関による白搗き精米がすでに広く行われ、大正中期には電力機関を使用した摩擦精米が約3割を占めていたという（註8）。摩擦精米への移行により、米の精白度が高まり、酒質の向上に役立ったといわれている。伊丹の酒蔵でも、こうした近代技術の導入に関心ではなかったと思われる。遅れながらも、新しい技術やそれに基づく施設の導入が行われてきたことが、今回の富士山蔵の一連の調査で明らかになった。

（小長谷正治）

註1 林野全季「町家と酒蔵」『伊丹市史』第6巻 伊丹市 昭和45年

註2 『伊丹酒造業と小西家』小西酒造株式会社 平成5年 75頁

註3 註1と同じ

註4 小長谷正治・川口宏海『伊丹郷町の酒造業』『関西近世考古学研究IV』 関西近世考古学研究会 平成8年

註5 註4と同じ

註6 井尻格『御影波かえし蔵—御影郷古酒蔵群第2次調査の記録』 神戸市教育委員会 平成16年

註7 『伊丹市史』第3巻 350頁

註8 『西宮市史』第3巻 296頁

第5章 結語

有岡城跡・伊丹郷町遺跡第203・217・231次調査は、平成7年の阪神・淡路大震災後に行われた震災復興・復興事業に伴う発掘調査である。この3回の調査は3ヵ年（平成9・10・11年度）にまたがって行われた。ここではそれぞれの調査における成果の概略を紹介し、結語としたい。

第203次調査では、酒蔵建物跡や、その内に設けられた洗い場・釜屋、槽場などの酒蔵遺構が検出され、江戸時代中期以降近代に至る間の酒蔵の変遷が明らかになった。また、室町時代ではSK63・93やSX20などから大量の瓦が出土し、伊丹城期の瓦葺建物の存在が明らかになった。

続く第217次調査では、新たに近代の槽場跡などの酒造遺構が確認された。また、室町時代のSD103（203次-SK93）やSX301（203次-SX20）などの堀状遺構から出土した大量の瓦には、鬼瓦や磚が含まれ、寺院建築に用いられていた瓦である可能性が高くなった。

第231次調査では、203・217次と同様に大量の中世瓦が出土したが、その大半は敷地北東隅で発見された池状遺構からの出土である。また、古墳の周濠が確認され、埴輪や須恵器が出土した。

今回の調査地には、調査前まで酒蔵の建物が残っていたにも関わらず、十分な建造物調査が行われないうまま取り壊されてしまったことは残念なことであるが、その後に行った発掘調査により、江戸時代中期以降近代に至る酒造遺構を記録に残すことができたことは幸いであった。酒造遺構の変遷については、第4章第4節を参照していただきたい。

報告書刊行までには、最初の調査から約9年の年月を要したが、その間に行われた古文書の調査・研究により、酒蔵所有者の変遷について検討が進み、今回合わせて報告することができた（第4章第3節）。

この調査地は、焼土とともに大量の中世瓦が出土した。伊丹城期の研究を進めていく上で大変重要な発見であった。現在のところ、出土した瓦の種類から寺院に使用した可能性がもっとも高いと考えられるが、文献記録がなく、今後検討を要する。出土瓦の分類・検討については第4章第1節、第2節に詳しい。

この有岡城跡・伊丹郷町遺跡は、現在、315次を数える調査が行われている。この中には未報告のものもあり、これから数年かけて整理・報告をしていく予定である。その過程で、有岡城跡・伊丹郷町遺跡の実像にさらに迫っていきたい。

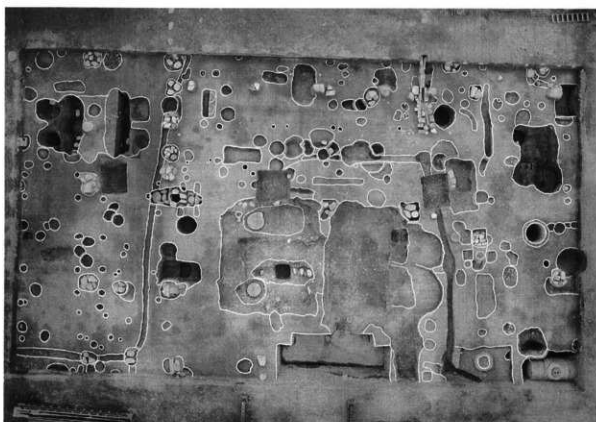
(中畔明日香)

図版1



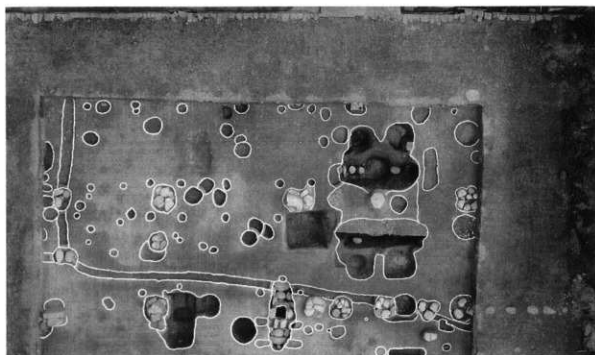
1. 遺跡近景（南東より）

兵庫県教育委員会撮影（平成4年）



2. 第1面全景（北より）

図版2



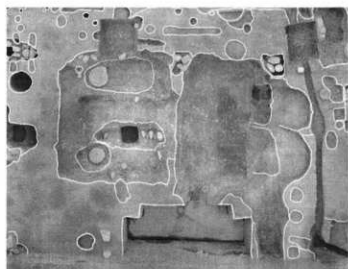
1. 礎石建物 4 (西より)



2. 礎石35 (南より)



3. 礎石30 (南より)



4. 礎石建物 2 (北より)

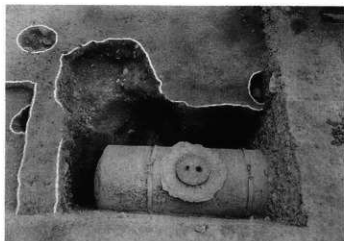


5. 燃料置き場 (東より)

図版3



1. 竈 1 (南より)



2. 竈 3 (北より)



3. 竈 4 (西より)

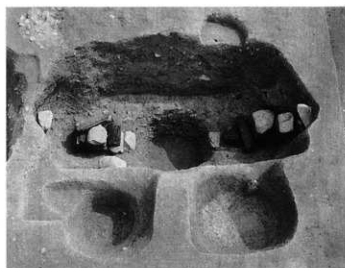
図版4



1. 槽 1~3、男柱 1、
垂壺 7~10 (東より)



2. 男柱 1 (北より)

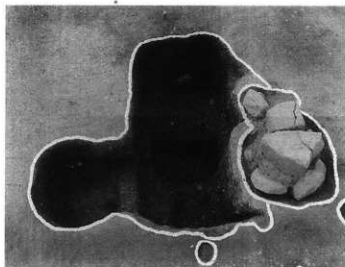


3. 男柱 2 (西より)

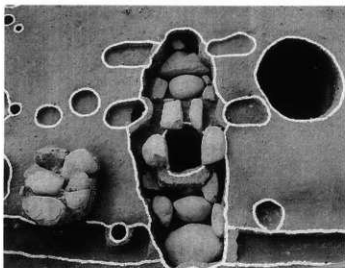
図版5



1. 男柱 3 (東より)



2. 男柱 4 (東より)

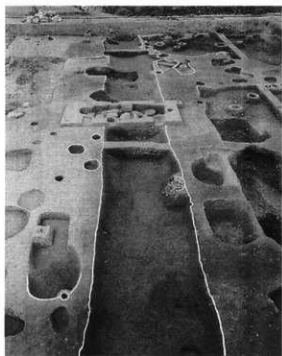


3. 男柱 5 (東より)

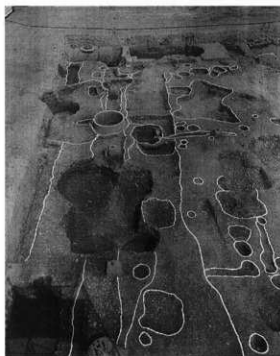
図版6



1. 第2面全景 (北より)



2. SD16 (南より)



3. SD22・23 (南より)

図版7



1. SK59・61・63 (南より)



2. SK63 (東より)

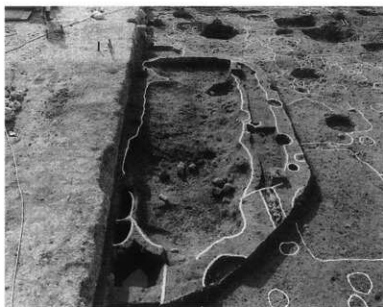


3. SK59 (北より)

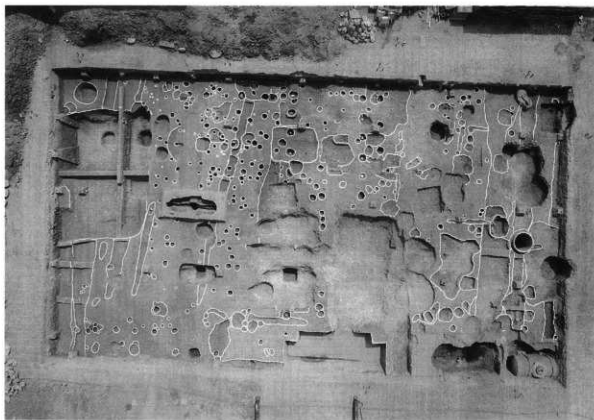
図版8



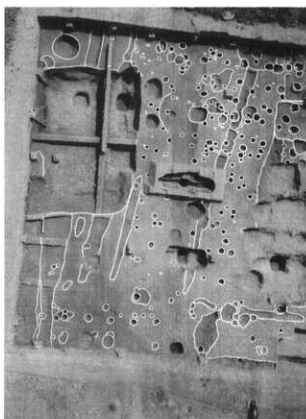
1. SX20 (南より)



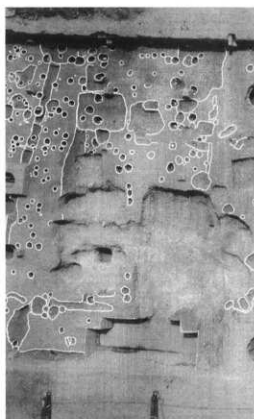
2. SK106 (東より)



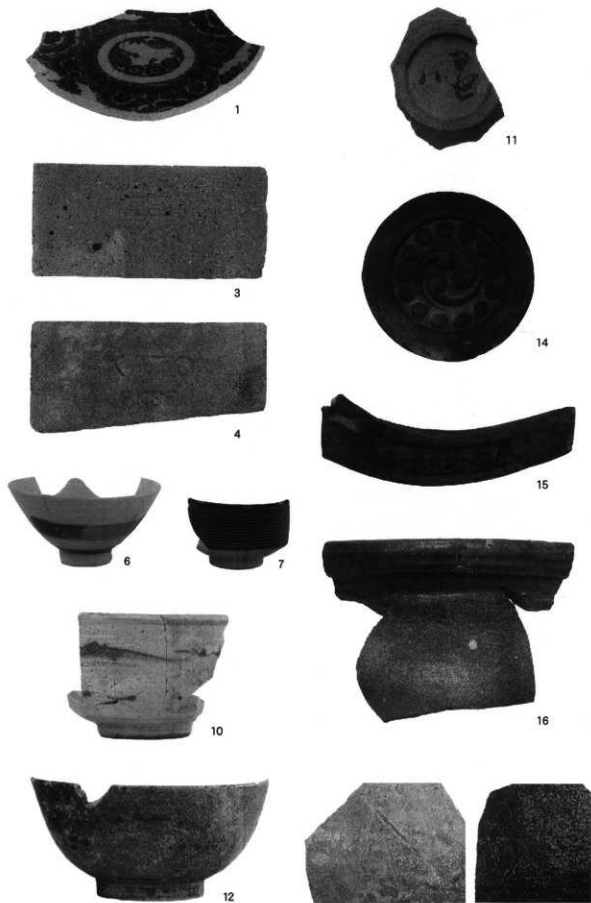
1. 第3面全景 (北より)



2. SD30・38~43・49・50 (北より)



3. 柱穴列1~3 (北より)



出土遺物 (1) レンガ窯 (1・3・4) 燃料置き場 (6・7)
竈 1 (10~11・14~16・152・153)

152

153

図版11



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



30



1



29



31



32



34



35



38



39

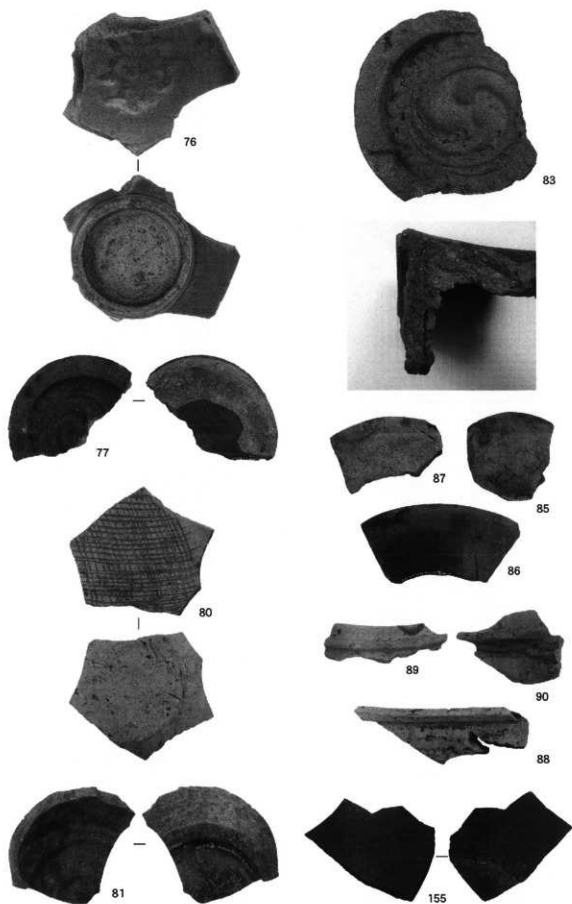


43

図版13



出土遺物 (4) SK 7 (45・46) SK241 (55) SP41 (57) SD16 (65・68・69・154)
SD22 (74・75)

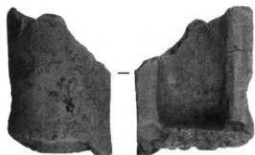


出土遺物 (5) SD22 (76・77) SX20上層 (80・81・83) SX20 (85~90・155)

図版15



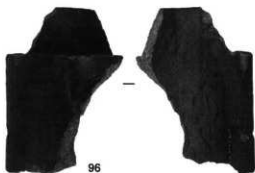
91



94



93



96

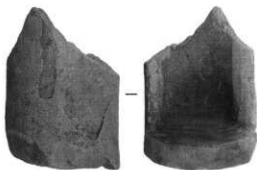


97





156



100



98



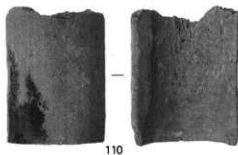
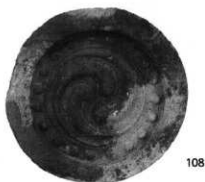
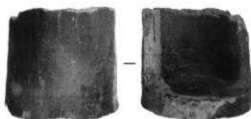
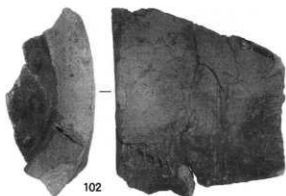
99



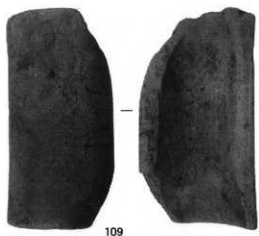
101



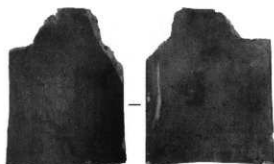
103



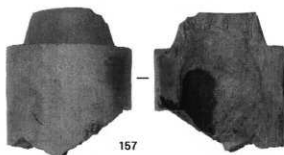
出土遺物(8) SK63 (102・104~107) SK93 (108・110)



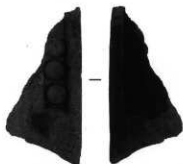
109



112



157



114



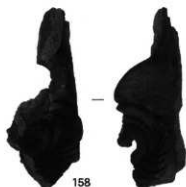
111



115



116



158

図版19



159



161



160



162



121



132



133



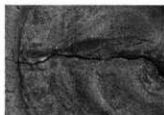
124



134



123



出土遺物 (10) SK93 (159・160) SK106 (121・123・124・161・162)
SK200 (132・133) SK206 (134)



137



138



139



141



140



146



147



144



143



142



145



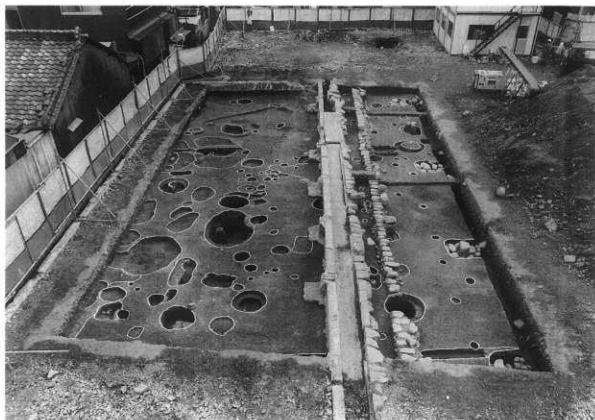
151



163



出土遺物 (11) SK208 (137) SK226 (138) SK228 (139) SK229 (140・141)
SP607 (142~147) 第3層 (151・163)



1. A区 第1面全景（北より）



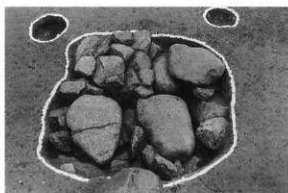
2. A区 礎石1（西より）



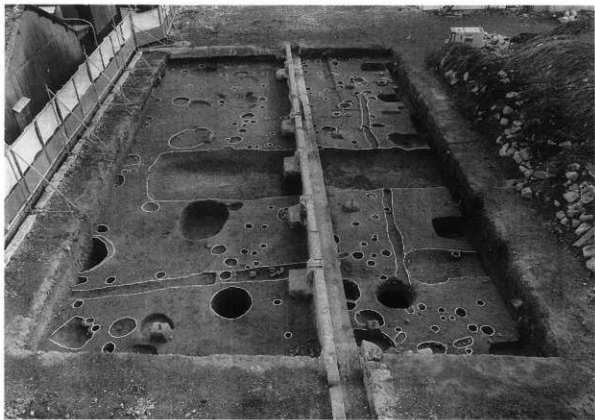
3. A区 礎石2（西より）



4. A区 礎石3（西より）



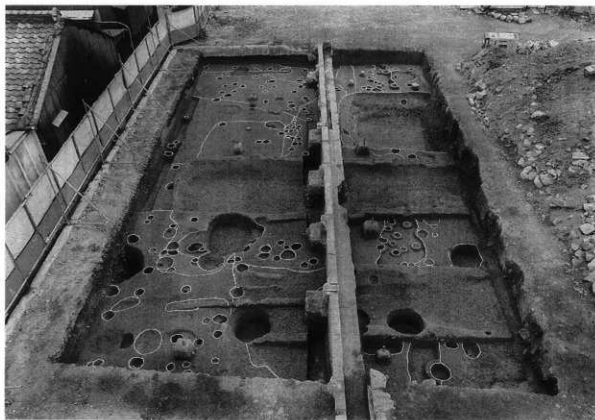
5. A区 礎石5（西より）



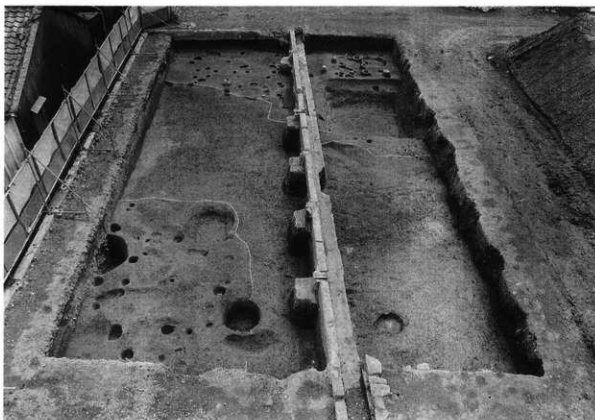
1. A区 第2面全景 (北より)



2. A区 SD103・SX301 (西より)



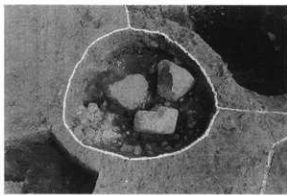
1. A区 第3面全景（北より）



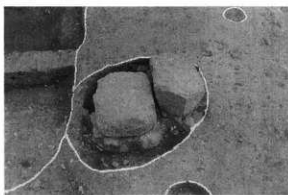
2. A区 SX302（北より）



1. B区 第1面全景 (東より)



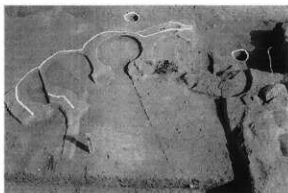
2. B区 礎石1 (西より)



3. B区 礎石2 (西より)



4. B区 煙突・煙道 (北より)



5. B区 竈1~5 (西より)

図版25



1. B区 竈9 焚口 (南より)



2. B区 槽1～3 (西より)



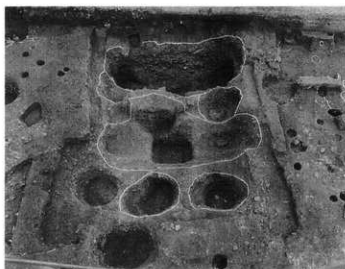
3. B区 槽1 (西より)



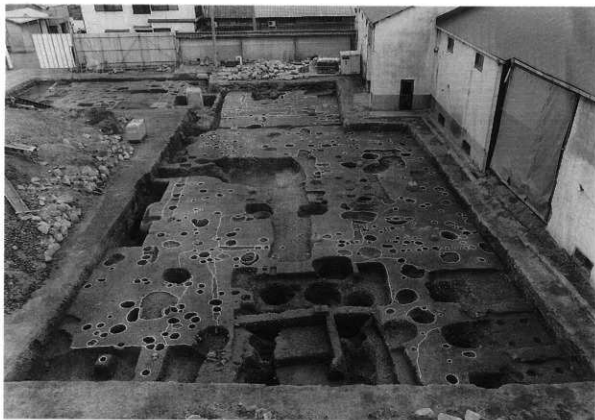
1. B区 槽4～8 (南より)



2. B区 槽8 (南より)



3. B区 男柱1・2 (西より)



1. B区 第2面全景 (東より)



2. B区 地鎮遺構1 (東より)



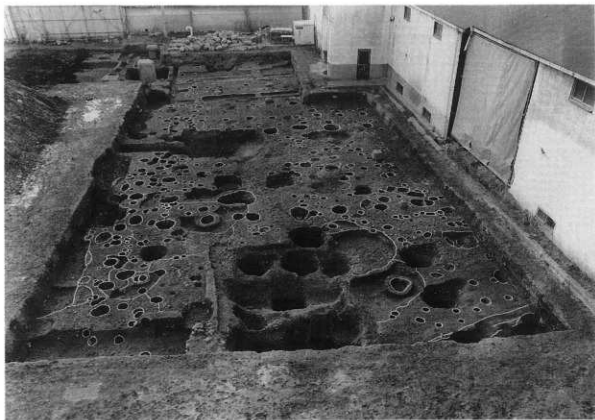
3. B区 地鎮遺構1 (東より)



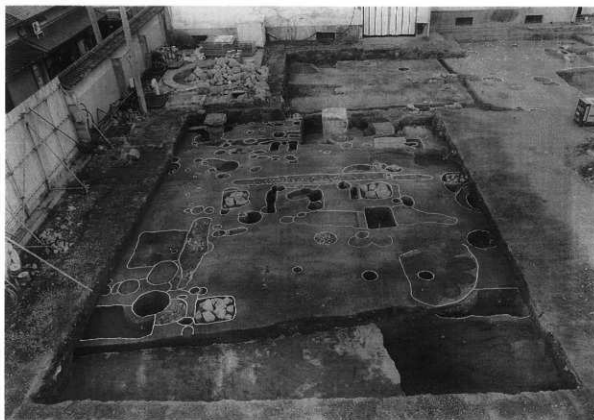
4. B区 地鎮遺構2 (東より)



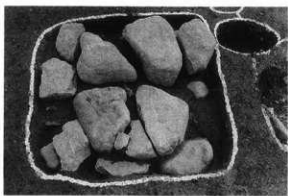
5. B区 地鎮遺構2 (東より)



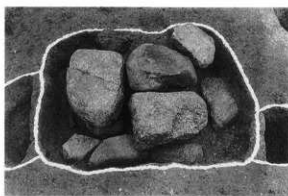
1. B区 第3面全景 (東より)



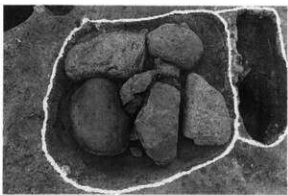
1. C区 第1面全景 (南より)



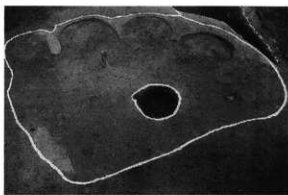
2. C区 礎石1 (北より)



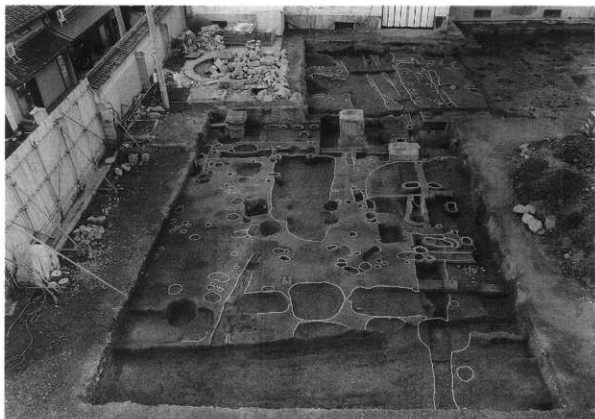
3. C区 礎石2 (西より)



4. C区 礎石3 (北より)



5. C区 竈1 (北より)



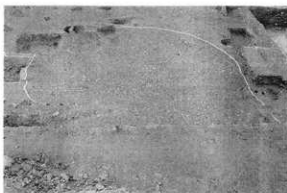
1. C区 第3面全景 (南より)



2. C区 SD203 (東より)



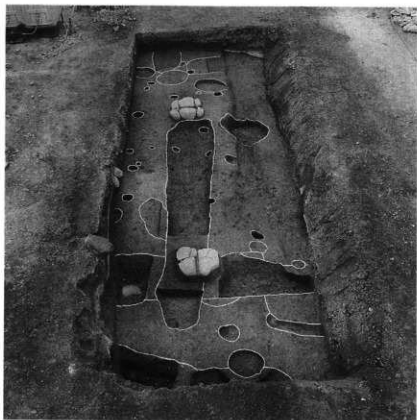
3. C区 SD205 (北より)



4. C区 SX201 (南より)



5. C区 SX201南北断面 (東より)



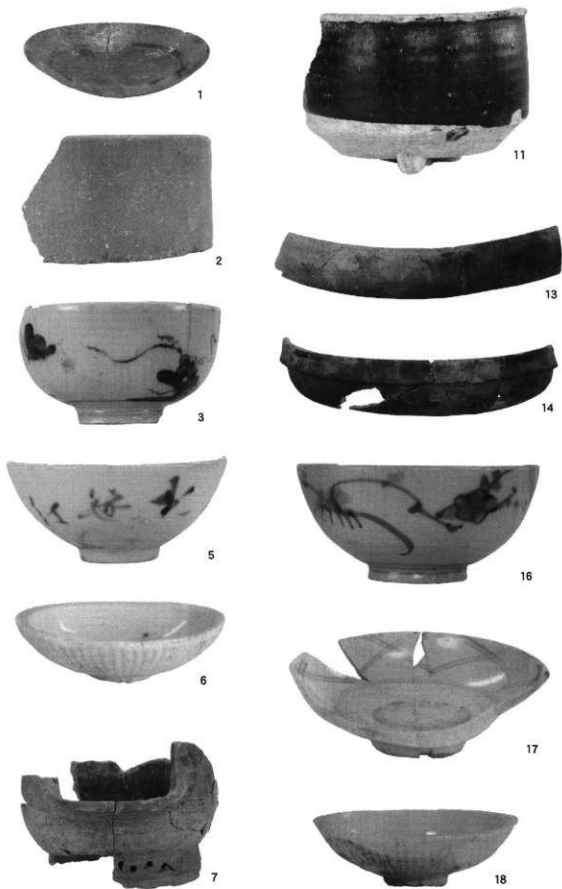
1. C区 拡張区第1面全景（東より）



2. C区 拡張区礎石4（南より）

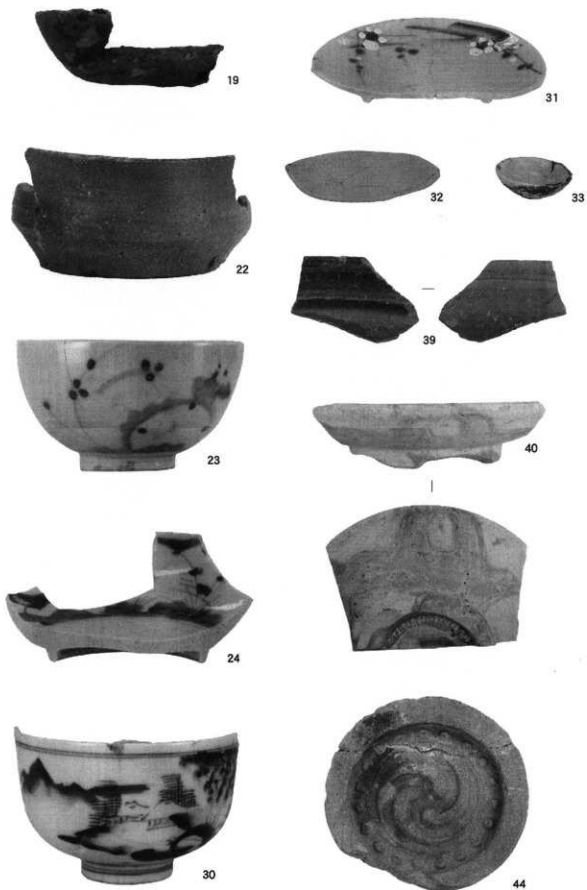


3. C区 拡張区礎石5（東より）



出土遺物 (1) A区 埋桶 1 (1~3・5~7) 埋桶 6 (11・13・14・16~18)

図版33



出土遺物(2) A区 埋桶6(19) 埋桶7(22~24) SX1(30・31)
SX2(32・33) SD103(39・40・44)



42



43



46

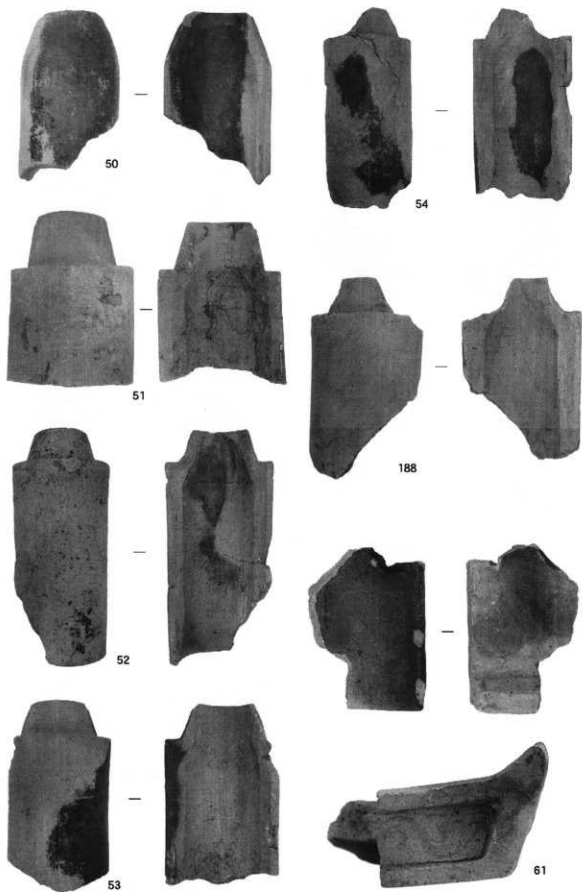


47

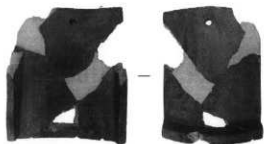


48

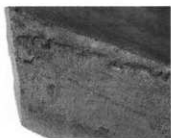
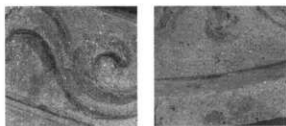
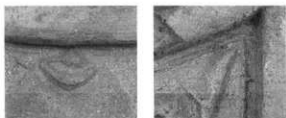




出土遺物(4) A区 SD103 (50~54・61・188)



55



63



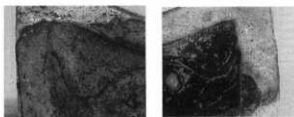
56



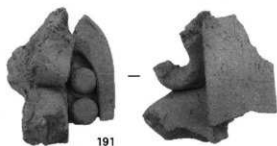
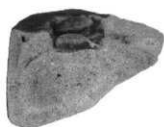
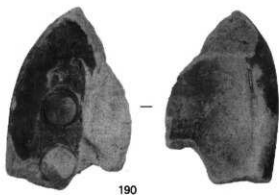
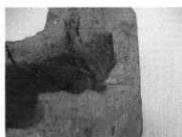
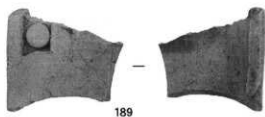
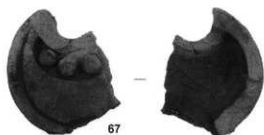
58

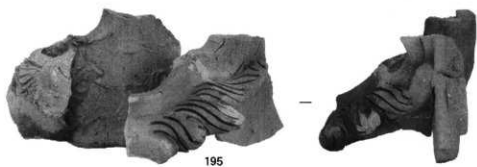


59



図版37





図版39



196



199



197



200



1



198

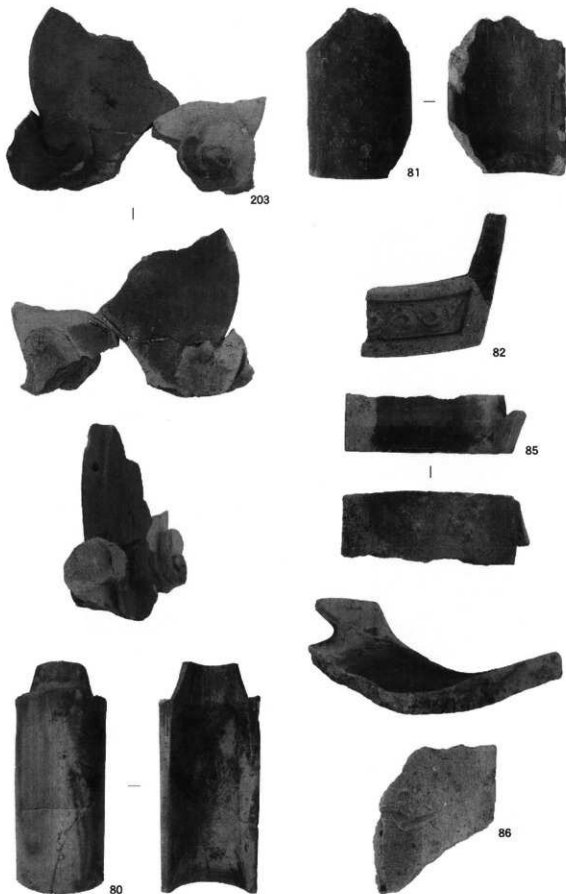


201

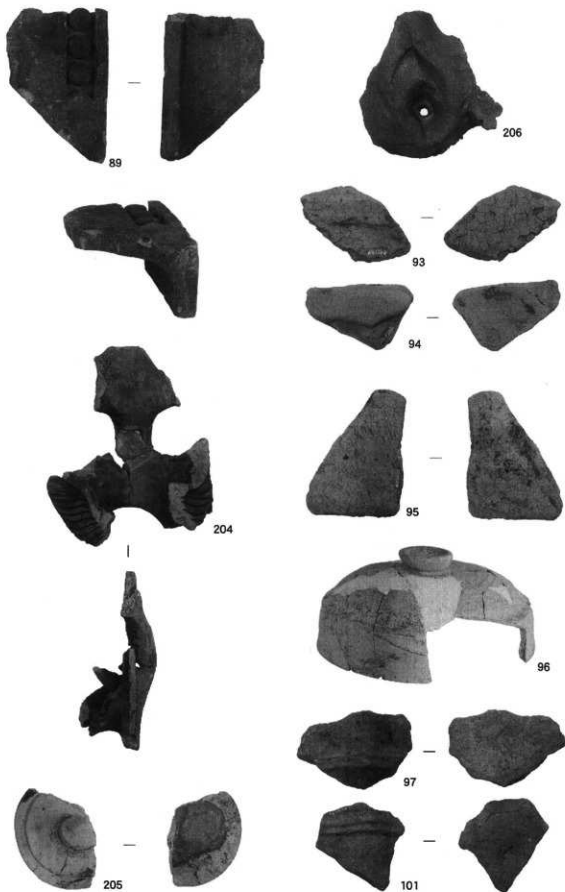


202

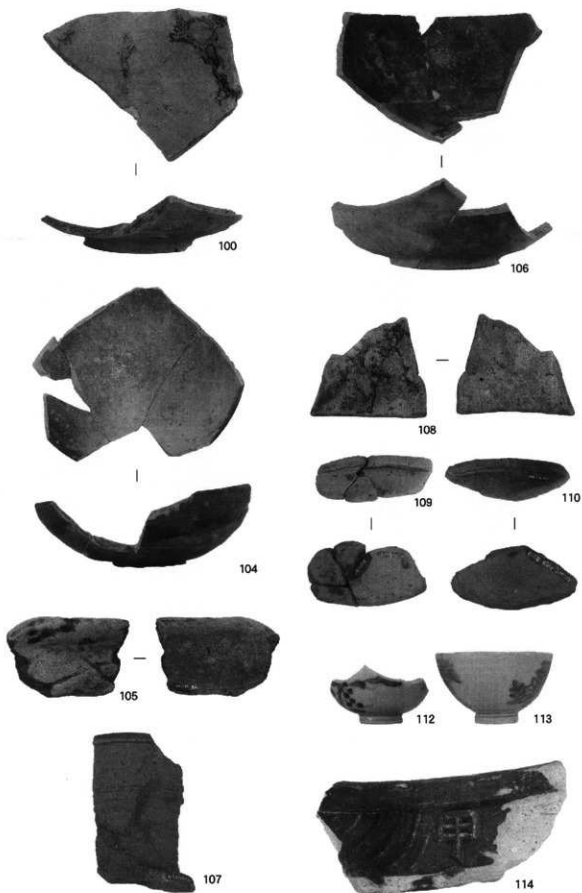
图版40



出土遺物(9) A区 SD103 (203) SX301 (80~82・85・86)

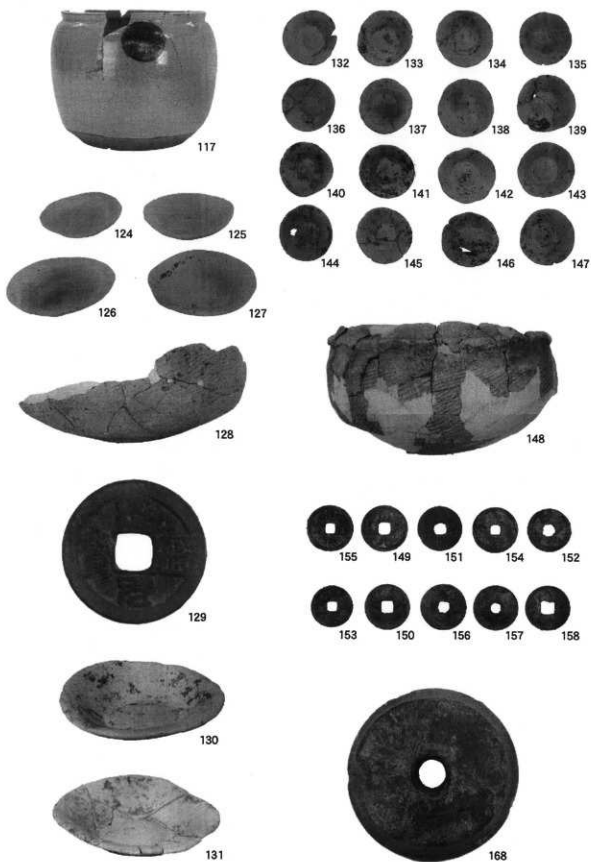


出土遺物 (10) A区 SX301 (89・204~206) SX302 (93~97・101)

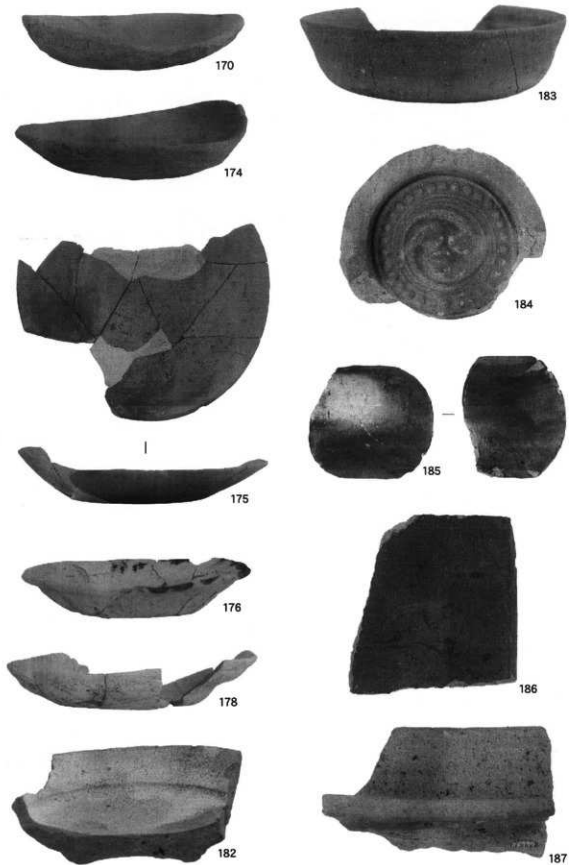


出土遺物 (11) A区 SX302 (100・104) SK310 (105) SP325 (106) SP337 (107)
SP373 (108) SP448 (109) SP498 (110)
B区 磁石 2 (112~114)

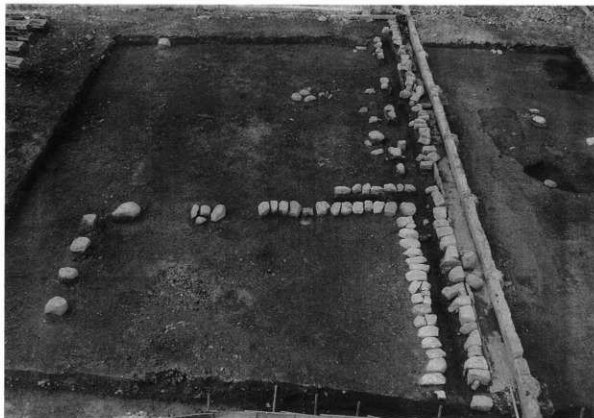
図版43



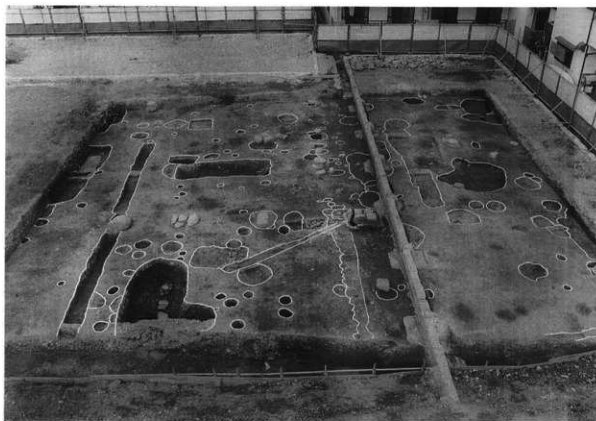
出土遺物 (12) B区 槽 5 (117) 地鎮遺構 1 (124~129) 地鎮遺構 2 (130~158)
SK332 (168)



出土遺物 (13) C区 SD 2 (170・174~176) SD203 (178) SK207 (182)
SK352 (183) SK208 (184・185) SK228 (186) SP303 (187)



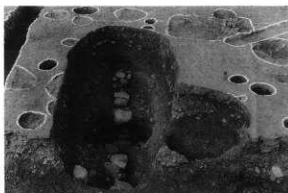
1. 北区 石列1～5全景(南より)



2. 北区 第1面全景(南より)



1. 北区 溝1 (南より)



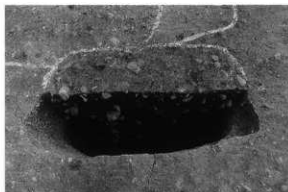
4. 北区 男柱1 (南より)



5. 北区 SX1 (南東より)



2. 北区 槽1 (北東より)



6. 北区 SK8 (北より)



3. 北区 槽2 (東より)



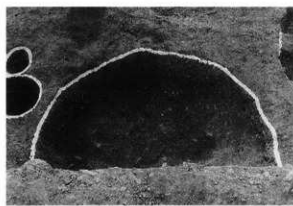
7. 北区 SK81 (北より)



1. 北区 第2面全景 (南より)



2. 北区 SD6 (南より)



3. 北区 SK70 (東より)



4. 北区 SK111 (西より)



1. 北区 池状遺構（南より）



2. 北区 池状遺構上層（北東より）



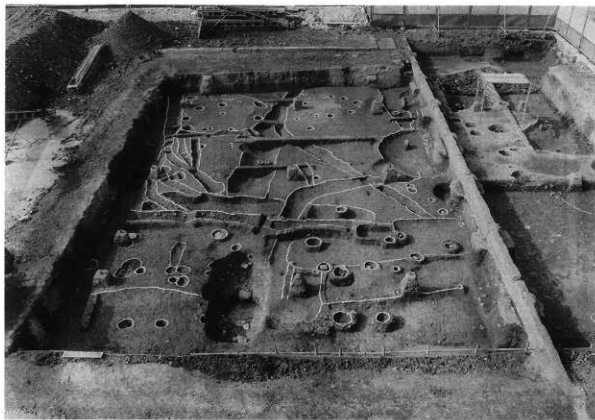
3. 北区 池状遺構石垣（東より）



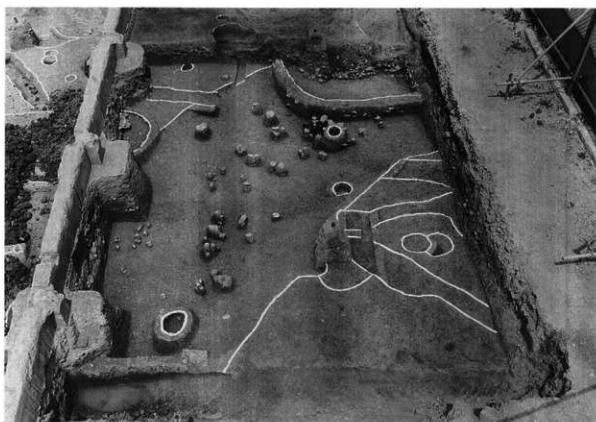
4. 北区 池状遺構下層（南より）



5. 北区 池状遺構瓦出土状況

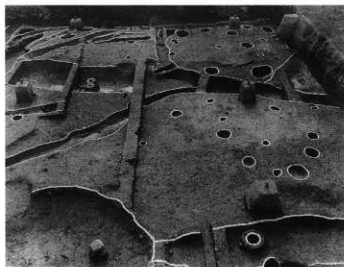


1. 北区 第3面全景 (南より)



2. 北区 第3面東側全景・SD35 (南より)

図版50



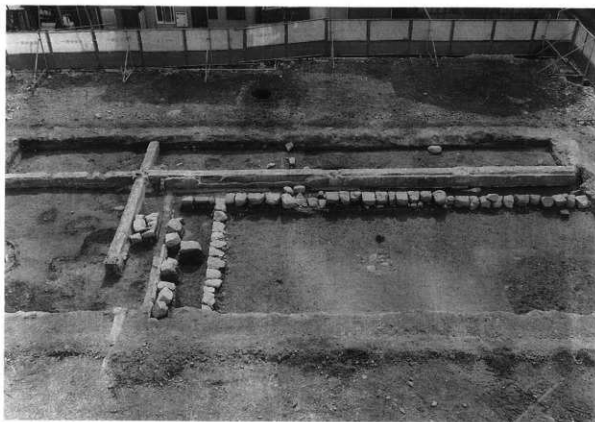
1. 北区 SD12周辺 (東より)



2. 北区 SD18 (北より)



3. 北区 SD25 (南より)



1. 南区 石列1～3全景（北より）



2. 南区 石列2・3近景（南東より）



1. 南区 第1面全景 (北より)



2. 南区 礎石1 (南より)



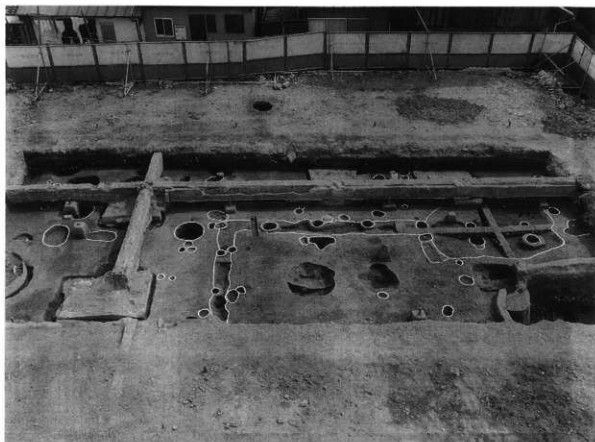
3. 南区 礎石2 (南より)



4. 南区 礎石3 (南より)



5. 南区 男柱1 (東より)



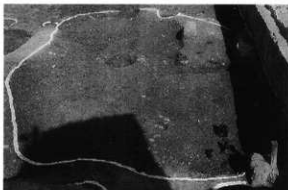
1. 南区 第2面全景 (北より)



2. 南区 第2面全景 (西より)



3. 南区 SK31 (北より)



4. 南区 SK31 (西より)



1. 南区 第3面全景 (北より)



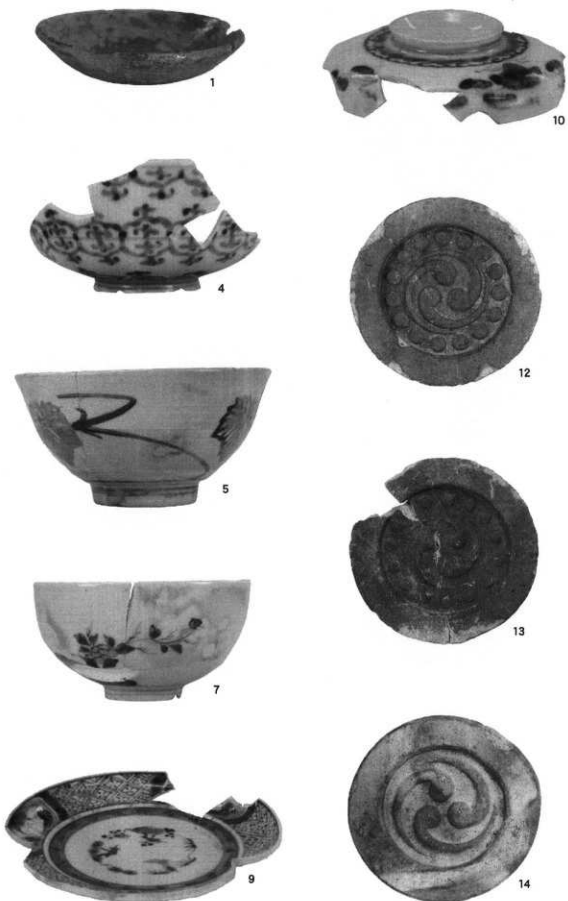
2. 南区 第3面全景 (西より)



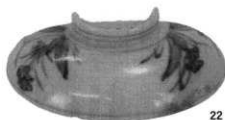
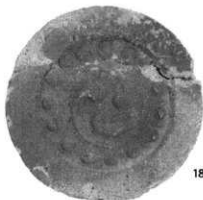
3. 南区 SD3 (北より)



4. 南区 SD4 (北より)

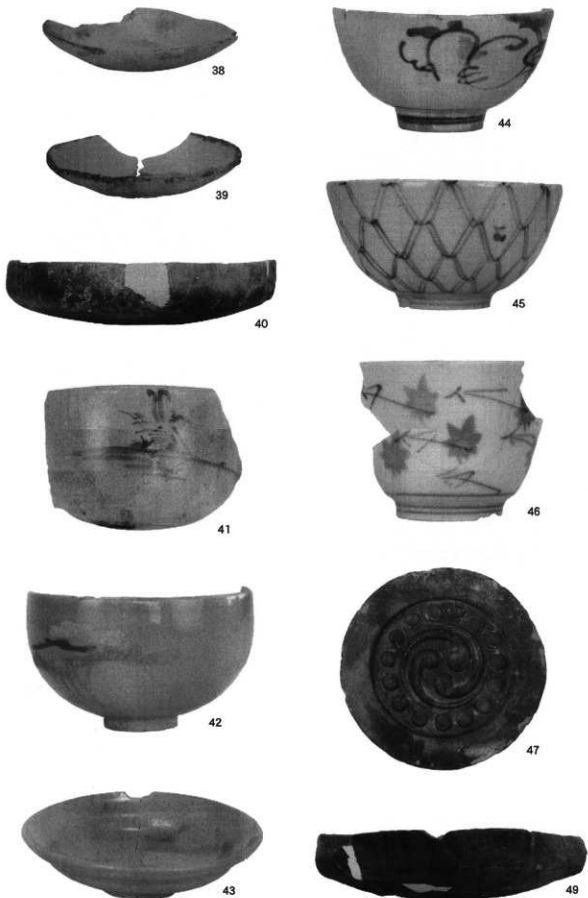


出土遺物(1) 北区 男柱1 (1・4・5・7・9・10・12~14)



出土遺物(2) 北区 男柱1 (15~18) 井戸1 (21~23) SK8 (30・32・34)

図版57



出土遺物(3) 北区 SK54 (38~47) SK81 (49)



50



61



54



63



59



65



60



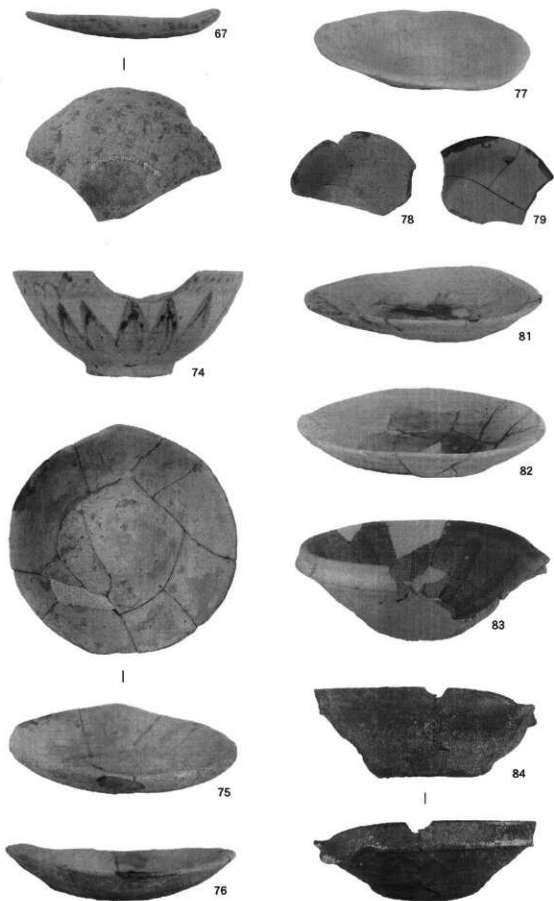
66



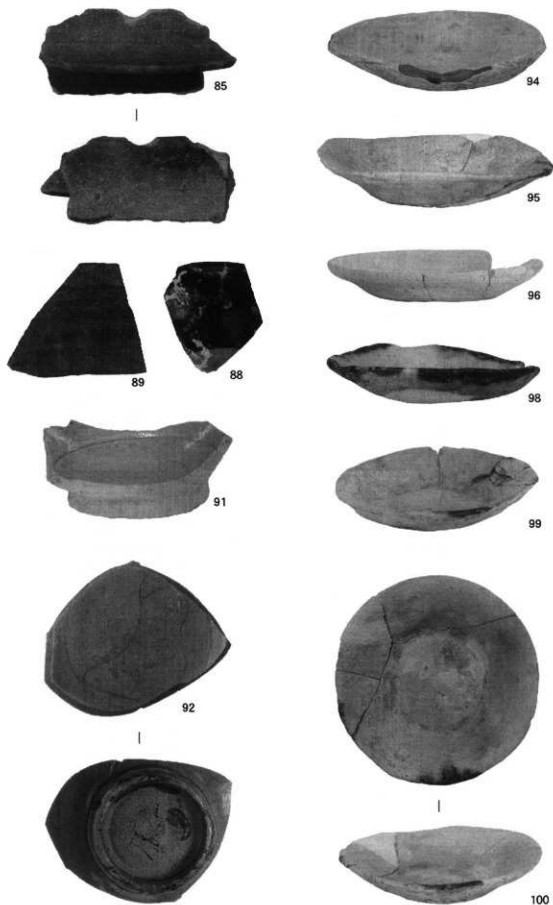
68



出土遺物(4) 北区 SK81 (50・54) SP61 (59・60) SP70 (61・63・64)
池状遺構 (65・66・68)



出土遺物 (5) 北区 池状遺構 (67・74~79・81~84)



出土遺物(6) 北区 池状遺構(85・88・89・91・92・94~96・98~100)

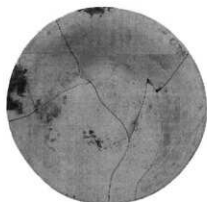
図版61



101



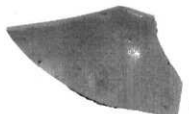
104



103



108



109



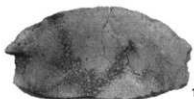
106



112

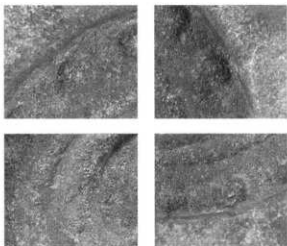
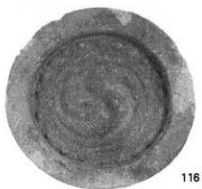
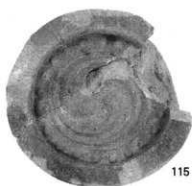


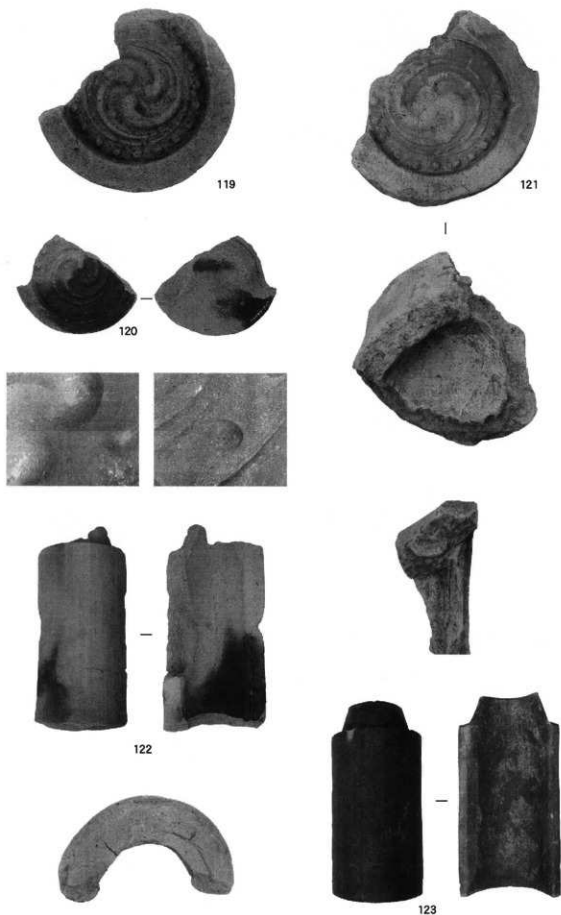
107



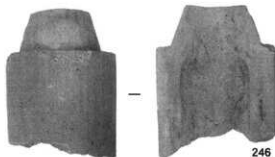
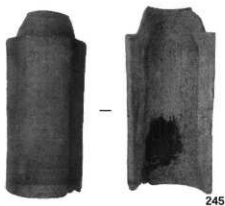
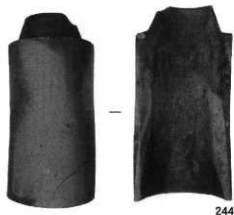
113

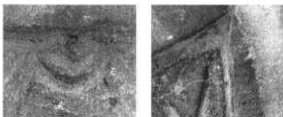
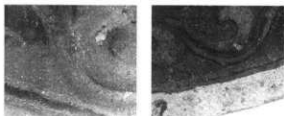
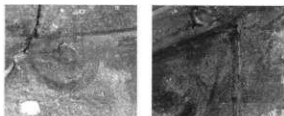
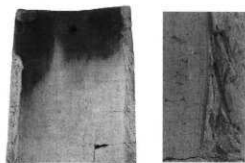
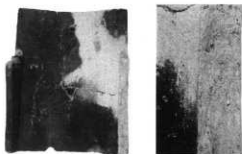
出土遺物(7) 北区 池状遺構 (101・103・104・106~109・112・113)





出土遺物(9) 北区 池状遺構(119~123)

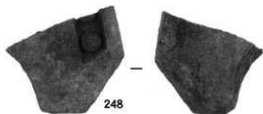
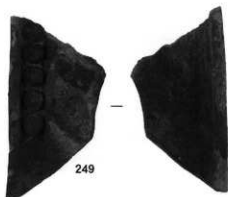
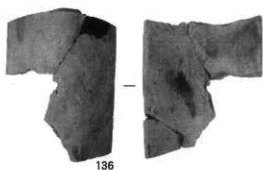






出土遺物 (12) 北区 池状遺構 (134・135)

図版67

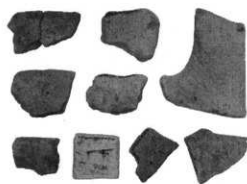
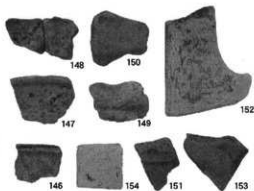


出土遺物 (13) 北区 池状遺構 (136・138・139・248~251)





252





157



180



158



183



166



186



167



187



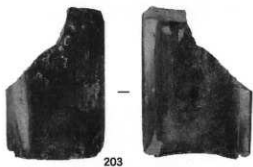
167



189



188





211



212



213



214



215



216



226



230



231



234



238

出土遺物 (18) 南区 SK7 (211・212) SK18 (213~216) SD4 (226・230・231・234)
西壁11層 (238)

報 告 書 抄 録

ふりがな	いたみしまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	伊丹市埋蔵文化財調査報告書							
副書名	震災復旧・復興事業に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	伊丹市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第32集							
編著者名	中畔明日香							
編集機関	伊丹市教育委員会							
所在地	〒664-8503 兵庫県伊丹市千僧1丁目1番地							
発行年月日	2007年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ありあかじょうさく・ いんなんちやうざいせき 伊丹郷町遺跡 第203次調査	伊丹市伊丹1丁目5	28207	61	34° 46' 44"	135° 25' 21"	19980216 ～ 19980331	700㎡	共同住宅建設
有岡城跡・ 伊丹郷町遺跡 第217次調査						19981222 ～ 19990331	1,100㎡	
有岡城跡・ 伊丹郷町遺跡 第231次調査						20000201 ～ 20000430	500㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
有岡城跡・ 伊丹郷町遺跡 第203次調査	城館跡・生産遺跡	中世・近世		礎石建物、礎石列、溝、竈、 槽、男柱、井戸、埋桶、堀 状遺構、瓦溜り遺構、柱穴、 土坑		土器・陶磁器・瓦 コンテナ61箱		
有岡城跡・ 伊丹郷町遺跡 第217次調査				礎石建物、溝、竈、槽、男 柱、井戸、埋桶、地鉄遺構、 堀状遺構、柱穴、土坑		土器・陶磁器・瓦 コンテナ86箱		
有岡城跡・ 伊丹郷町遺跡 第231次調査				礎石建物、溝、竈、槽、男 柱、池状遺構、周濠、柱穴、 土坑		土器・陶磁器・瓦 コンテナ131箱		

伊丹市埋蔵文化財調査報告書第32集
伊丹市埋蔵文化財調査報告書
震災復旧・復興事業に伴う発掘調査
2007年3月

発 行 伊 丹 市 教 育 委 員 会
兵庫県伊丹市千僧1丁目1
TEL 072-783-1234
印 刷 アイシー印刷株式会社

